

4849

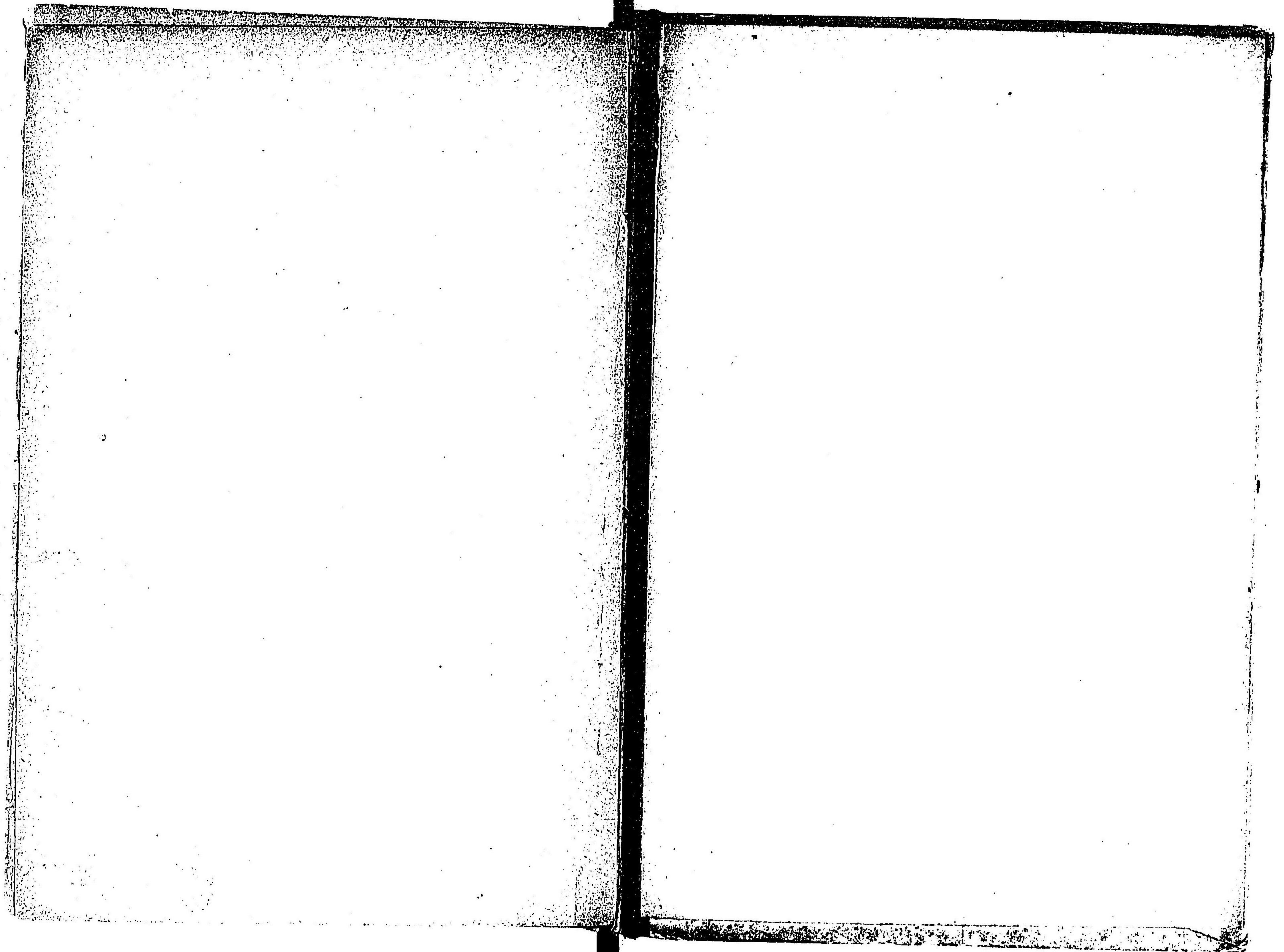
719  
1  
24

# 滑稽日口演說

瘦公字序皮演  
人演說



行發社隆共京東



ツて口をワングリ明て居る。大勢の中よハテナと考へる者。フ、ンと獨り吞込の人。何たんベエと不審を抱く田舎漢。面白からうと微笑を含む滑稽好。各自種々様々の評を初めた。甲曰くム、又演説か宜マア種の有つたものた。乙曰く道人の演説ハ實意表ぢや。丙曰く是も定めと悪口たらう。丁曰く同ト笑はせるのでも此人の作は骨がある。戊曰く此人ハ飴ヲ包んで藥を飲せると云ふのハ主義たさうです。斯人々が評を中よ。ナ、ニ何様趣向ク献立ク知らんが人の眞似たりら駄目た。ト云ふ一言が衆

人の耳を貫ひて聞えた。之を聴と一人の活潑生腕を捲り肩を怒らし。オイ君一寸待給へ。人の眞似どの何の噓言。君ハ目の無い人か耳ハ無いか。と不思議も辨護する人が飛出と。ヒヤ、と吐鳴者もあり。パチパチと手を拍つ者もあり。活潑生は益々勢ひよ乗トて口を尖らし。君が眞似と云ふのハ他ハ演説がイクヲも有るりらであらう。然が君よ能く面を洗ッて氣を慥し仕給へ。雉子も啼せハ打れまいとハ君の事。全体滑稽演説の元祖ハ何處の何人である。即ち此骨皮道人たる事ハ三ツ子でも知ッて居る。知らぬハ只君

滑稽一口演説の序

場所は東京で目抜の銀座二丁目自家の構造煉瓦石  
の窓二階は見よがし出した素敵滅法界の大立看



板願は白文子の墨色淋漓として滑稽一口演説の  
六字往來の人々の皆壓氣取れて膽を潰し  
千人寄り百人集り恰も梨子の心に蟻の集會  
自前様其人種を分拆すれば官員紳士商人百姓翁  
権を新造年増権助お三小僧赤ン坊皆雅也

和意くと看板を取巻た脊の高い人低い人脊の高  
い人が生憎と前へ突立つ低い者の人の肩より下



ツて口をワングリ明て居る。大勢の中よハテナと考へる者。フ、ンと獨り呑込の人。何たんベエと不審を抱く田舎漢。面白からうと微笑を含む滑稽好。各自種々様々の評を初めた。甲曰くム、又演説か宜マア種の有つたものた。乙曰く道人の演説ハ實意表ぢや。丙曰く是も定めし悪口たらう。丁曰く同ト笑はせるので。此人の作は骨がある。戊曰く此人ハ飴ヲ包んで藥を飲せると云ふのが主義たさうです。斯人々が評を中よ。ナ、ニ何様趣向ク献立ク知らんが人の真似たり。駄目た。ト云ふ一言ク衆

人の耳を貫ひて聞えた。之を聴と一人の活潑生腕を捲り肩を怒らし。オイ君一寸待給へ。人の真似どの何の噤言。君ハ目の無い人か耳ハ無いか。不思議も辨護する人が飛出と。ヒヤ〜と吐鳴者もあり。パチパチと手を拍つ者もあり。活潑生は益々勢ひ乗トて口を尖らし。君が真似と云ふのハ他ハ演説がイクヲも有るうらであらう。然ガ君よ能く面を洗ツて氣を慥し仕給へ。雉子も啼きハ打れまいとハ君の事。全体滑稽演説の元祖ハ何處の何人である。即ち此骨皮道人たる事ハ三ツ子でも知ツて居る。知らぬハ只君



一人。然れば外の演説こそ道人の真似。殊に一種奇妙の滑稽の道人の専有。と雄辨滔々立板。水語未だ畢らざるにヒヤクの喝采の天。響き。骨皮道人万歳の聲の地を動す。驚き覺れば。是かん酔倒れの一夢なり。其儘記して以て共隆社員の代理を勤むる者の

居り兼筆記者の 和良井 鋤太

滑稽一口演説目録

特 982

- 第一席 一口演説お饒舌の趣旨……………十五
- 第二席 先入が主とある……………十八
- 第三席 金を溜て何とする……………二十
- 第四席 鼻薬との何ぞ……………廿一
- 第五席 色の好むべし溺れる勿れ……………廿三
- 第六席 依頼心の廢すべし……………廿五
- 第七席 稼ぐ方法……………廿七
- 第八席 猿が人か人が猿か……………廿八

○第九席	手紙と言葉との關係……………三十
○第十席	手紙の書方……………卅二
○第十一席	古今証書の沿革……………卅三
○第十二席	犢鼻褌をめて掛れ……………卅五
○第十三席	柿の實み就て感あり……………卅六
○第十四席	屁の説……………卅八
○第十五席	奉公人の証明書……………卅九
○第十六席	奉公人の目的……………四十
○第十七席	女の惚たど云ふのハ……………四十二

○第十八席	迷ひの説……………四十三
○第十九席	人を正さんと欲せば先己を正せ……………四十五
○第二十席	人の屑……………四十六
○第二十一席	色氣より食氣……………四十七
○第二十二席	書家の衰頹……………四十九
○第二十三席	未來記……………五十二
○第二十四席	有名無實の説……………五十四
○第二十五席	セーブル人間……………五十六
○第二十六席	堪忍の説……………五十八



○第七席 浮世の夢の如し……………五十九

○第廿八席 花を觀の鍼……………六十

○第廿九席 風流の眞似……………六十二

○第三十席 山師論……………六十四

○第三十一席 馬の耳は念佛……………六十六

○第三十二席 媚の字の辨……………六十九

○第三十三席 耳の功能……………七十一

○第三十四席 相鋸の説……………七十四

○第三十五席 アベコベの説……………七十七

○第三十六席 長命せよ……………七十八

○第三十七席 一致の説……………八十一

○第三十八席 不倒翁の説……………八十二

○第三十九席 泣ッ面は蜂……………八十五

○第四十席 髯の種類……………八十七

○第四十一席 炒豆を食て感あり……………八十九

○第四十二席 苦樂の説……………九十二

○第四十三席 オツカアの説……………九十四

○第四十四席 道理が絲瓜り絲瓜が道理り……………九十六

○第四十五席 無理が通れぬ道理引込む……………九十九

○第四十六席 餅の利害……………百

○第四十七席 人の金銭の奴隸……………百二

○第四十八席 蒔ぬ種の生ぬ……………百四

○第四十九席 親父の戒めを思ひ出……………百六

○第五十席 看板は偽りあり……………百七

○第五十一席 怒を遷す勿れ……………百九

○第五十二席 鬼の説……………百十一

○第五十三席 家鴨人間……………百十三

○第五十四席 似非論……………百十六

○第五十五席 馬車の馬……………百十七

○第五十六席 娼妓を買ふ三法あり……………百二十

○第五十七席 知れ切の話……………百廿四

○第五十八席 論語讀の論語知らず……………百廿七

○第五十九席 鶏口とあるとも牛後となる勿れ……………百三十

○第六十席 子供の行儀悪さの親の教よる……………百卅一

○第六十一席 時候晩れの説……………百卅四

○第六十二席 日本の職人の何故に活智をさる……………百卅五

○第六十三席 丁寧よも程あり畧をるよも程あり……百卅八

○第六十四席 應來寐兒よ一本參る……百卅九

○第六十五席 夫婦喧嘩を戒む……百四十二

○第六十六席 お目玉の説……百四十七

○第六十七席 誤多交の説……百五十

○第六十八席 交際の御馳走の廢すべし……百五十二

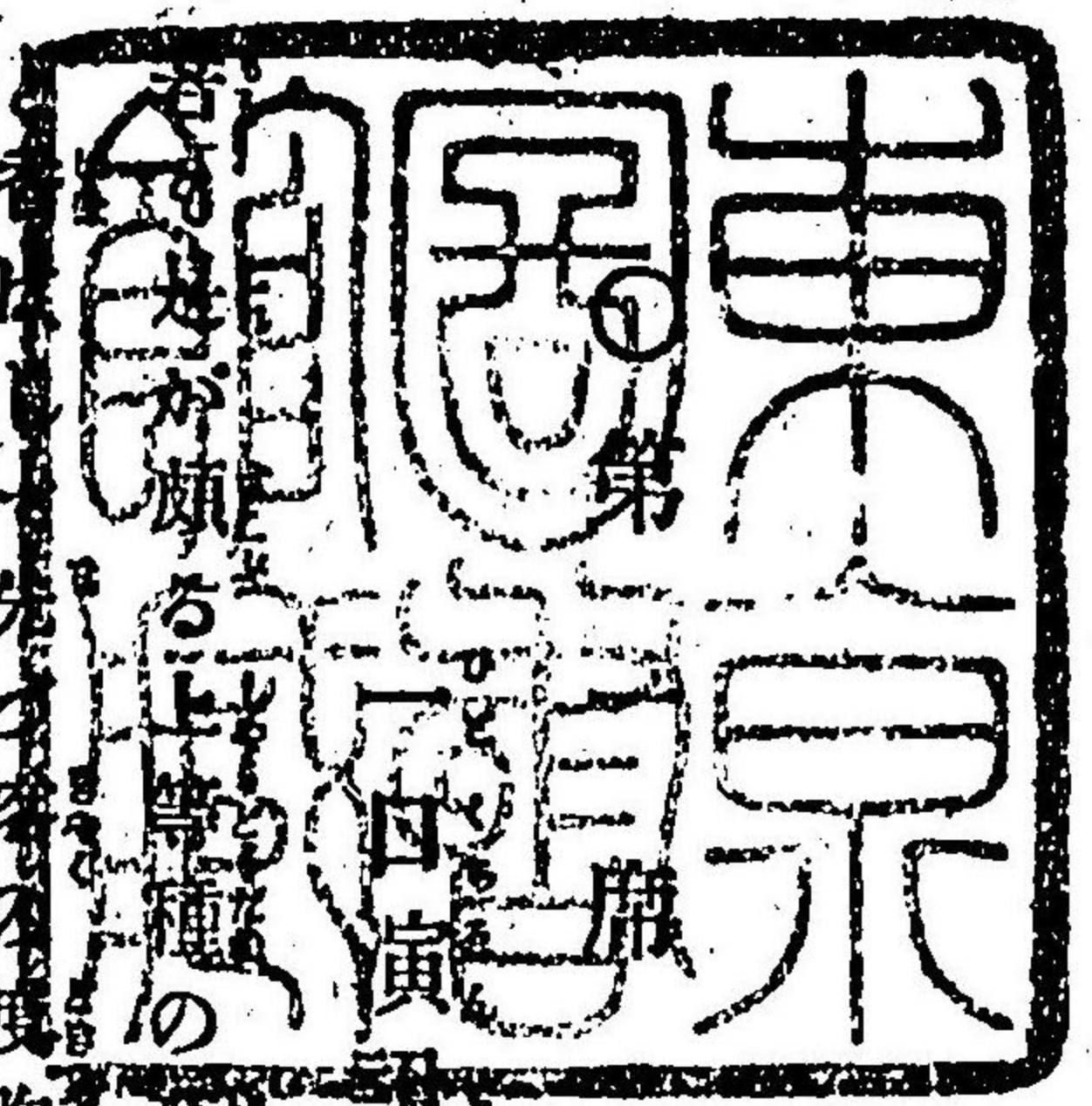
○第六十九席 好事家の注意……百五十四

○第七十席 一口演説のお仕舞……百五十七

目録終

滑稽一口演説

瘦々亭骨皮道人演説  
和良井鋤太筆記



お饒舌の趣旨

君の方でも陽と來れば陰と受けるの理で自然と鼻の下がメラリと伸る  
涎がタラ〜と流れ出す様を譯ですがドウも此黒狸が月蝕を拜む様を  
面をして治郎がノッソツと出たと云ふもの誠に愛嬌の無いもので御座

いまず殊に骨皮道人あどの吾身で吾身が分アらさいと云ふほどの瘦ッぱ  
ち治郎ですから折角諸君が伸し掛けられた鼻の下を縮めて仕舞ひ折角出  
掛った涎を引込して仕舞ふやうさ武骨男ゆる此様な面の皮厚く出鱈目を  
饒舌る様ももの、實に諸君に對してお氣文字様に存じますト云ッたら諸  
君の中に其様にお氣文字様から廢止バ宜にと仰しやるお方もあるか知  
れませんが成程道人もモウ廢止たい此様な落語家の上前取見たやうさ事  
の遣り度さいのですすが何に致せ共隆社が慾張で爪の頭が長アい處へ持來  
てオット是の極内ですよ(ヒヤ)演説最負の諸君から演説の何だ後の未  
かくと頻に御催促があるので例の爪の頭の長アい共隆社のサア耐忍が  
ラレくさいからハテ平生御最負にあるお花主様から斯毎日演説くと  
御催促が來るのに之を知らぬ顔の半兵衛さんで居ての諸君へ對して義務  
が立ん餘り不人情のやうで世間へ顔向が出来さいト云て尻を向れば劍突  
を食ひ尻を嗅せりやア禿頭をボカーンと張倒されるとか何とかマア杓子

夫

形に定職を振回したものと御覽じろ(ヒヤ)ソッロで其定職の飛  
ッ尻が道人に及ばして來て先生何卒モウ一度演説をして下さるまいか  
と共隆社も中々如才さい男ですから珍しく先生の肩書を附て依頼で参り  
ました斯依頼で來られて見ると道人の全体俠氣のある男ですから頼れた  
事の決して肯首の振さい之を飲で呉と頼れりやア酒の一升や二升の縦ひ  
飲あくツても樽の儘で自家へ持て歸ッて來る又これを食つて呉れと云は  
れりやア團子の十串や二十串のペロリ食つて仕舞ふと云ふ性質だし殊に  
看客諸君から演説の御所望とあつて見ると共隆社の切置て道人の身に取  
ても有難涙がボロリと出たり引込たりする次第ですからム、宜し  
い夫ぢやア最一席お饒舌を仕べエと云ふ事にあると何町の何番地から這  
出して來たか和良井鋤太とか何とか云ふ奴が鉛筆と洋筆と眞書筆を一脊  
儀脊負て來てサア筆記あがらも腕の續く丈の筆書から君も口の續くだけ  
饒舌給へと責附られて今度の一山百文の一口演説と出掛ましたが何に致

七

六  
せホンの一口ツ、のお饒舌ですから中に物足さいのもありませうが又  
中に結句短くて狂味のあるのもありませうから其邊の豫て娯笑知の上  
でお聴取を願ひます……エ、ト最少し云ひ度事があるが餘り長くなる  
からは後廻しに致しませう(大喝采)

### ○第二席

先入が主とある

扱諸君よ諸君の中に飲酒最良の方もありませうし又牡丹餅主義の人  
もありませうが一寸此の世間を見渡した處で牡丹餅八分に酒が二分位  
でドウしても下戸の方が多數を占て居るやうで御座いますから其頭數の  
多い牡丹餅主義でお話しの口を明ますが彼の砂糖湯を調製するに先づ  
茶碗の中へ砂糖を入れて夫から湯を注のと湯の中へ後から砂糖を入れるの  
と何方を何しても同じ事でありさうあるのだが決して爾でない砂糖を  
先へ入れたの甘い砂糖を後から入れたの左程も甘くさいやうで御座い

ます是の全体何云ふ譯で御座いませうイヤ何云ふ譯も斯した理屈もさい  
砂糖を先へ入れバ砂糖が先入の主とあり湯を先へ入れバ湯が先入の主と  
あるからの事で別段砂糖屋の虎の巻を見あくつても化学者や究理學士の  
講釋を聞無くつても能く知れ切て居る事で御座いませ(ヒヤ)故に諸君  
も折角造物者から二ツの翠丸を貰つて此世に飛出された以上の何事でも  
人に先んじて負さい様に又人の尻尾に附さい様に心掛るのが男子たる者  
に無くてあらい氣象だ云ふ處に目を附られ度もので御座いますと斯  
云ふ道人あどの常此氣象を帶て居りませから人と頭割で餅を食ても一  
番先に甘想を奴を五ツ六ツ両手へ引摺んで仕舞ます夫だから人の様は餅  
が無くあつて仕舞てから湖ッ片羅の生姜を嚼つたり跡に残つた笹ッ葉を  
見て悔しがる様を屈間を働いた事只の一度も御座いませんイヤ其様を  
事の何でも宜として置て次の演題に移りませう(大喝采)

### ○第三席

金を溜て何よせる

新様お演題を擔ぎ出したら諸君の先廻りをして何だ筈棒臭へ金を溜て  
 何にするも角にするも有るものか金さへ有やア美衣服も着られるし甘い  
 物も食られるし立派な家へも住居るし面白い物も見聞が出来るから金を  
 溜るので何にも外に不思議な事いはい是れ誰にでも知れ切れた事だと仰し  
 やるで御座いませうが成やど夫に違ひありません爾諸君の方で云はれて  
 見ると道人の云ふ處が無くあつて仕舞て只口をワングリ明て道人の方で  
 ヒヤ／＼と云ふより外に御挨拶の仕やうが無いやうですが決して爾であ  
 りません如何様諸君の仰せの通り金を儲け金を溜て衣食住を十分に仕や  
 う小町か楊貴妃の如き別嬪を金で釣出さうと云ふ目的で金を溜らるゝあ  
 らば道人の何とも申しませんが廣い世間には諸君の様に一から六まで辨  
 へて居る人ばかりでの御座いません中には年箇年中三百六十五日元日  
 も大晦日でも丸で飢饉年の積古見たやうに食物も碌々に食す寒中に成つ

て風ヒツ／＼の雪ナラ／＼で地震の孫か何ぞの様にガタ／＼震へあがら  
 着る物も着ず只無暗矢鱈と金を溜る事ばかりに一生懸命の人が儘ありま  
 すか全体遣はあいな金を其様に溜て何にする積りでせうか道人にの些とも  
 其了簡方が了解あいが諸君の之を何と思し召ますかト是でお仕舞大喝采

○第四席  
 鼻薬との何ぞ

薬の種類は澤山ありますけれども其大別を云へば丸薬散薬水薬煉薬煎薬  
 の五種で御座います爾して其丸薬や散薬の病又因て調合の致方が違ひま  
 すから一概に是が何で是が斯だと云ふ事の出來ませんが一寸見ると鼻薬  
 を丸めて製へた様な丸薬の万金丹にして守宮を黒焼にして製へた散薬の  
 惣薬で御座います其外月經不順の妙劑に寶母散あり大便の通じ薬に即  
 下丸あり氣附に寶丹神薬あり腎虚の薬に紫雪三臟圓あり梅花香の打身切  
 旋明治水の梅毒淋病越中富山の返魂丹の小兒一切の奇薬岸田の精鏡水の

眼病の妙薬石炭酸の虎列刺病の豫防薬熊の膏の眠わかざれ霜焼の妙薬  
 どの醫者の飯と食かい我々素人でも大抵其薬の名と効能とを知って居り  
 ますけれども同じ薬で有りながら鼻薬と云ふ者の何と何とを調合して製  
 造たものやら又た丸薬やら水薬やら煉薬やら散薬やら煎薬やら膏薬やら  
 些とも譯が分りません又た其薬の種類さへ分らない位ですから其効能の  
 何の病に利目のある者やら道人にハッパリ知れませんが或藪醫先生の  
 説に此鼻薬と云ふものハ金銀貨或ハ紙幣を以て製へるもので其効能ハ  
 縦ハ閻魔が鹽辛を嘗めた様お親父でも此鼻薬を吞せればハッコと笑ハ殊  
 又た猫の癩癩病おどにハ著るしき奇効を奏すると云ふ事で御座います  
 が若し此の藪醫先生の云ふ通りあらハ誠ハ良薬のやうに思はれます併し  
 何様お奇効があるにもせよ薬と名の附く以上の餘り好んで吞む品でハ有  
 りますまい(ヒヤ〜大喝采)

○第五席

色の好むべし溺る勿れ

此地球上にオギヤアと飛出して尤も赤鬚さんや豚尾坊主の赤ん坊ハ何様  
 お泣聲して飛出すか知りませんが(ヒヤ〜)凡そ米を食ハ或ハ麵包を食  
 ふを目的として此娑婆に生れた動物即ち耳目口鼻と二本ツ、の手足を具  
 備て居る人間と云ふ者の何様お怪面治郎でも何様お茶ッ非阿魔でも馬  
 鹿でも利功でも問拔でも傾魔でも躰でも跛脚でも盲目でも啞者でも慾の  
 無い人間と云つたら只の一人半欠もかい慾ハ即ち天性で御座います(ヒヤ  
 ヒヤ)併し慾と云つたからとて只慾と云つた計でハ分りますまいが慾にも  
 色々の種類がありまして旨い物が食たい美衣物が着たい面白と思ひが仕  
 たい結構お家屋に住たいと思ふのも皆お慾で御座います其數の多い慾  
 の中でも第一番の上座に据ゑて有功の逸蕩賞牌を興ふべきハ色慾で御座  
 います人間の腹の中を打明て見ると外に何にも是と云つて目星ハ代物の  
 ない唯色の一點張と云つて差支へないで御座いませう(ヒヤ〜)然から人

間の一生と云ふもの取も直さず色の爲に勉強し色の爲に苦勞し何でも  
 難でも爲る事さす事皆赤色の爲に追使はれて其鈍詰りに棺桶へ潜り込の  
 を以て人間の本望として居る有様で御座います故に古人の寐言にも「世の  
 中の岩戸神樂の初めより女あらずの夜の明ぬ國」と云ふ事が御座います  
 道人の思ふ處で岩戸神樂處でいかにソノ大昔しのノアの洪水前から  
 文明開化の今日に至るまで色あるに因て社會を保ち色あるが爲に能く治  
 して居るのだらうと考へます(ヒヤ〜)然るを唐の唐人の(オット重言)賢を  
 賢として色に易よだの之を戒むるの色あ在りあどと小言を云ふといハト  
 不粹の寐言でお察しが無さすぎる様に思ひますソコで道人が極粹を取扱  
 ひをして諸君に申し上るの外でも御座いませぬ諸君も折角色と慾を以  
 て色の世界に生れて來られたから飽まで色にお好み成さい藝者の買  
 度人の藝者も買ひ女郎の好き人の女郎も買ひ私窩子に馴深があれハ私窩  
 子と寐物語りするのも宜しいが只此色に溺れて身を誤り身代を無茶苦茶

よせぬ様も成さいますし(大喝采)

○第六席

依頼心の廢すべし

昔時加賀の國で俳諧の妙を得たお千代さんと云ふ別嬪さんが詠た句「朝  
 顔よ釣瓶とられて貰ひ水」と云ふ句が有りませぬ是れ仁の意を含んで居ると  
 云ふ處から吾も人も皆これを古今の名句と稱して居るので御座います  
 成程朝顔が折角釣瓶竿も絡み着て花高く天狗らしく咲て居るものを僅か  
 一杯か二杯の水を汲む爲に取拂ひを食せて夫が爲る時を得顔も咲た花  
 もチユウと慕まかくて成りませぬ夫で誠にも可愛想だと云ふ處か  
 ら隣へ行て水を貰つて來たお千代さんの心掛の實も感心な事で御座いま  
 す併しおがら是がさう旨く行たから宜やうなもの、若も其反對も行て「牽  
 牛花め自己の釣瓶をナセ取た」とか何ぞか不風流な無慈悲な遭遇した日  
 やア如何も牽牛花が蔓を伸して一生懸命も巻着て居ても人の所有權を犯



した以上のボツリと切ッて刎除けられても誠と據ころ無い譯で迎も上告も哀訴も駄目で御座います(ヒヤ〜)扱さう成た日又成つて見ると是まで色々又工夫して咲た花もチユウと蒸んで仕舞あくて成りますまいシテ見ると此朝顔の命脈の只釣瓶竿一本あるの御座いますガナント諸君劍香あ一六勝負での御座いませんか(ヒヤ〜)然るを此朝顔が釣瓶竿に依頼せずして自分一個で獨立な花を咲せたならば千代さんをして隣まで足を運ばせる世話もかく又た不風流な無慈悲な遭遇しても何の苦勞もかく即ち天然の花を立派な咲せる事が出来ませぬ故に人間も矢張り其通りで人又依頼して咲た花の當り成りませぬから諸君も願はくは釣瓶竿又依らずして自分一個で天賦の自由を得るやうに御注意ガ肝心で御座いませう(ヒヤ〜)喝采)

○第七席  
稼ぐ方法

諸君よ果報の寐て待てと云ひますが是の昔しの馬鹿人足が我々も向ッて嘘を突たので決して寐轉んで居たり握り罫丸をして居て果報が来る譯の者での御座いませぬ若も寐轉んで居たり握り罫丸をして居て果報が来るものからバ道人あどの第一着も果報を専有してお目も掛ますガドウして印紙を貼つて三人連借の証書が取てある貸金でさへ返ささい位の此世痴辛ひ世の中も寐轉んで居て果報を得るおど〜の思ひも寄らぬ事で御座いますから若し人間並に金が欲しいと思へバ何しても稼ぐも追附く貧乏あしと云ふ正則を踏んで行より外又仕方がありません(ヒヤ〜)底でマア此正則を踏むとした處で只毎日毎晩夜も晝もノベツと稼ぐ譯も行きませんイヤ行かない事ありませんが夫での人間の御本尊様たる命が無くあつて仕舞ひますから同じ貧乏と駈ッ競するよしした處が何とか方法を立かくて成ませんトコロで或人の説に時計貯金〜〜と回ッて居ると一所に稼げバ宜と云ひましたが是の前申したノベツ稼ぎの方法で

すから謂ふべくして逆も行はれ難い事で御座います又成人の説に太陽様と一所に稼ぐが宜と云ひました是の何するのかと聞いて見ると太陽様が朝東の方へ頭を出された時に此方でも夜具から頭を潜り出して夫から太陽様が頭の上でピカ／＼と見張て被入る時だけセッセと稼いで太陽様が西の山へお這入にかれバ此方でも仕事を止めると云ふ様にするのでと云ましたが是奴ア成程良方法で御座ますト是で先第七席がお仕舞(大喝采)

○第八席

猿が人か人が猿か

昔時或人が太閤様に向つて御前の餘程猿の顔に似て入ッしやいますねへと云つたら太閤様の例の負る事の嫌ひをお方だから是の失敬な事を云ふ自己が猿に似て居るのぢやない猿が自己に似て居るのぢやと云はれたさうで御座ます又近頃西洋人の説にも人間の元猿から化變つた者だらうと云ふ説もあるさうですが是とても人間が仲間外れして猿に化たものやら

猿が人間に變じた者やら丁度太閤様が猿に似て居るのやら猿が太閤様に似て居るのやら何方が何とも分らぬいと同じ事で其儘お處の造物者にお目に掛つて聞いて見なければ判然しませんが道人が大目玉を明て今の人間世界を見渡した處で如何様人間の猿から化變つたのかも知れぬと思ひます(ノウ／＼ヒヤ／＼)ナせ道人が自分も人間の仲間て居りながら人間を猿の社會へ落すかと云ふに元來猿と云ふ奴の外の獸類との違つて智慧もあり真似をするのも上手で御座いますケレども其智慧の固より鼻の先ばかり真似をするると云つてもホンの形をするばかりで其真似の爲めに我身に災害を招く事あどの知りません故に人間でも只鼻元思案で後來我身の失策事に氣の附かい淺墓者者を指して猿利功或ひ猿智慧を云ひます(ヒヤ／＼)諸君試みよ眼玉を開いて社會の有様を御覽じろ果して此猿利功の人物の無いで御座いますか又た人真似をすれば其結果の我身に災害を招くと云ふ事を知つて居る人間計で御座いますか道人の全体人

間最負の男で御坐いますすがドウも今の處で餘程猿に似た人物が多い様に思ひます扱斯成つて見ると猿が人か人が猿か些とも了解ませぬ(大喝采)

○第九席

手紙と言葉との關係

手紙と云ふもの口で云ふべき處を筆で書のですから手紙の取も直さず言葉の寫真と思つて居れば間違ひ無いで御座いませう然れば手紙と言葉との大關係のあるもので強ち手紙に書バカウ口で言バドゥと差別のあるべき者で無からうと思ひます(ヒヤ)然るに何の世如何ある處から此様に爲たものですか只今の姿で手紙と言葉との全く反對の有様を爲して居りまして例へば甲乙とが面と向つた時の言葉に「オイ君—君ア彼の骨皮道人の滑稽演説を持って居るか持て居るから少し借ヤ」と斯云ふ隔のあい友人の間柄でも之を手紙に書と丸で大違ひで「前略御海恕下さる可く候陳れば毎度申し兼い得ども貴兄若し骨皮道人の著作せる滑稽演説と

題する書籍御所持にいつい暫時拜借願ひ度御承諾の上何卒この者へ御渡し下され度此段貴意を得い也」あと、大變小八ヶ間しい事にありますト云つて之を言葉の通りに書た日にやア東京の職人あどの手紙の夫こそ大變ヤイ吉—手前演説の本を持って居りやア借ねへか此治郎借ねへと頭ア張コッルぞと是で丸で決闘狀見た様で餘り殺風景だし又た田舎漢が「ッレハア權右衛門ぞんやお前様ア演説の本ノウ持て居さッしやるサウ事だが些とんべエ借て呉ッしやれや」と此様お鹽梅で餘り色氣が無さ過ますけれども何に致せ手紙の成べく言葉に睡んで平生お世辭を云つた事もあひ癖に手紙に「お世辭を書たり面と向つての碌玉にお辭儀とした事も有りも仕あいに手紙の中へ再拜頓首あど、虚言を突あひ様に改良しての如何で御座いませう(大喝采)

○第十席

手紙の書方

道人の前段に於て手紙に改良を加へての如何と申す事をチヨツピリ申し  
 陳ましたが今度の手紙の書方に就て是もチヨツピリ申し述やうと思ひま  
 す(謹聴)扱手紙と云ふもの誠又造作もあい様で中々六々敷もので御  
 座います尤も花見に出掛あいかと御馳走に成つて有難いとか只一事件  
 の誘ひ手紙や禮状の左程でもありませんが若も是が六ツ七ツと数の多い  
 事件を長たらしく書とあると兎角よければかりが多くあつて彼の落語家の  
 能く言ふ通り此の書損ひなのには御座いて今度のには本當のには御座  
 いと云ふやうな事に成り勝つもので御座います(ヒヤ)ソコで道人の爺  
 が常に教ましたに手紙の分り易いのが専一だらう能く分る様に一事件  
 毎に一打をして書よと教られました成程さうすると大變分り易く書ま  
 す今其例を擧て見ますればマア斯云ふ塩梅で御座います  
 一昨日御立替申し置は頭割の勘定此者へ御渡し下され度  
 一婆アの病氣も生憎と追々快氣は越々誠は相困り

一借金の云譯に餓鬼のお使ひの以來御免を蒙り度  
 一日外の着物の流されての少し不都合に付き利上の事に御取斗らひ置  
 下さるべく  
 一馬鹿に附る藥の賣捌所を御承知にのり御知らせ下され度  
 一越中轡鼻揮の寸法の何尺何寸に裁御教示願ひ度  
 一泥坊に商賣替を成さるとの貴君にも不似合の御目的と存じは問是の  
 先づ御見合せの方然るべく様に存じ  
 先づ斯云ふ風又遣かすのが至極便利で能く分ります(大喝采)

○第十一席

古今証書の沿革

諺に義理と憤鼻揮の虧く事が出来いと云ひますが成程古の人の旨い事  
 を云つたもので御座います若し人にして義理を思はず人情を顧みず屈の  
 尻糞の糞と只手前の身勝手に任して少しも人の頭痛を痴氣又病む事が無

かつたからバ万物の靈と云ふ名目は何處へ持て行つて粘着ませう只ホンの人間の皮を被つて居ると云ふ丈の事で御座います(ヒヤ)道人が曾て或老人の談話を聞きましたよ今を距ると凡そ百年前後の頃の人から金を借ますにも証書の只一判で其文句の誠にサツとしたもので借用の金子相滞はりし節の他人の中にて御笑ひ下さるべくいし書た者ぢやさうで御座います其後にあると笑はれても金を返さない方が宜と云ふ様を横着な奴が殖ゑて来たから今度の証人を立る事に成たのぢやさうで御座います夫から段々移り變つて今日にあつて見ると証人を立るばりて無く之に印紙を貼り又抵當を入れて儲か上にも儲にして然して其功能の何うだと云ふと昔時の御笑ひ下さるべくいの方が儲たとの扱々今日の人情の實に持み難い人情での御座いませんかエト最少し何とか云はふと思つたんだが……マア宜や一喫煙遣ておらの事に仕やう(ヒヤ)くくく)

○第十二席

犢鼻褌を締て掛れ

マ、ヤット思ひ出しました道人が諸君に注意を促がさうと思つたの犢鼻褌を締て掛れと云ふ事で御座いまして尤も越中やモッコや西洋犢鼻褌で少し都合が悪いけれども(ヒヤ)扱諸君濟時の閻魔顔でも地獄顔でも面附に關係な事ア悪い貸した物の返しさへすれば宜のですが前にも云ふ通り印紙を貼つて抵當を入れて置きながら返濟の期限が来るも酢だの蒟蒻だのと種々様々の熱を吹てトの詰りが勘解から民事裁判へ出て夫から身代限りの處分を受けて百圓の抵當に編笠一蓋を遣つてア、宜氣味だと祝ひ酒を飲むやうな奴が澤山の世の中どの實に是れ道德地を拂ひ破廉耻旗を揚るの有様で誠にくくくく驚き桃の木山椒の木ワロンと開た口が何時まで達てもバツリと塞がらぬ次第で御座います(ヒヤ)其人心の輕薄を主義とするの管み金銭上の事ばかりで無く利に向へバ義を忘れ慾に罹れば忠を忘れ事と品に依れば親父の頭でも張倒

そかも知れず兄貴を蹴飛ばして其身代を分捕かも知れぬいと云ふ處まで歩を進めて來ましたから他人の痛いのや痒いのや些とも構ひませぬ扱斯あると何して之を防いだら宜かど云ふに先づお互ひに横鼻樫を堅くめて掛るより外に仕方ありません……諸君どうです面白いでせう諸君曰くナ、些とも面白くない道人曰く是奴ア大失策……夫ぢやア最一層横鼻樫を締めて掛りませう(大喝采)

○第十三席

柿の實は就て感あり

柿に種種の名が有りますけれども是の諸君も能く御承知で御座いませうから道人の別段お饒舌の致しません其名の種々ありましても其種類の只甘い質と渋い質との二種で御座います爾して其柿の實が熟した時に甘いのと渋いのと二個を以て諸君この二個の柿で何方をお取りに成りますかと聞かば食慾の人情の発かされる所で下司張た食意地の張た人が多

から十人の中で八九人までの夫やア甘い方が宜甘い方のガリくと直に食へるけれども渋柿の唯糞詰りの種を仕入る様あるのだから誰が渋柿かんぞを好むものかと被仰るよ違ひないサア爾云つて下さると演説の種にあるので御座います(謹聴)諸君試みに思ひ給へ柿の甘い種類の成ほど旨いに違ひ有りませぬが唯旨いと云ふばかりで其外に何一ツ是と云ふ功能の御座いませぬ然るに人々が渋いのを嫌つて甘いのを取の直に噛れるのを利とするので所謂目前の慾に傾くので御座いますソコで渋柿のドゥぶと云ふと直に之れを噛る事の出來ませぬけれども之を樽に入れば樽柿とあり之を乾せば干柿と爲り又た之を壓窄て製すれば渋が出来ます故に苟くも將來の利を思ひ異日の益を圖る者の能く考へあくてのあらぬ事で御座いませう(ヒヤ)大喝采

○第十四席

尻の説

或人の出鱈目に『屁を放ればお腹が空で気が晴て尻の埃も取れてサッパリ』と云ふ事がありすが如何様ツボンの處を旨く穿ちました元來屁と云ふ奴の食物の消化糞小便の子分又して造化組織の至微至妙なる者で御座います(ヒヤ)其物さる形無ければ其聲がありまして其音の尻より出で其香の鼻に入り芬々として一時の快を取るべき一個の妙具で御座います決して鼻を摘んで擯斥すべき者で御座いませぬ然るも世の頑愚者の屁を放るを先敬とし或ひ汚穢と云ふの何たる開化かい奴で御座いませう人間の屁を放るの恰も龍が火焰を吐と同じ事で只彼の猛火を吐き是の臭火を吹き彼口より吐き是の尻より吐の違ひが有るばかりで御座いませぬ然らば屁の尙ぶべき道人が今更申す迄も無く殊に諺にも出物腫物處嫌すと云へば縦ひ親父の目の前に於てブーと遣るも主人の鼻の頭に於てブーと遣るも決して遠慮するに及びませぬ(ヒヤ)ノウ)好んば彼に一步を譲って屁を放るの失敬の至りとした處が彼の空屁をブーと

遣つて腫で之を壓へ是が露顯た後に顔を眞赤にするよりの寧ろ公然ブーと遣た方が却つて一座の喝采を博しますから凡そ男兒たる者の何事も此氣込で遣らねば行きませぬ併し諸君の此理屈を以て屁の様事と思し召ば道人の唯へいと申すの外ありませぬ(大喝采)

○第十五席  
奉公人の證明書

道人の自慢ぢやアあいが實の未だ洋行した事がありませぬから西洋諸國の風俗や人情の些とも知りませぬが實際洋行して來た或人の話しに彼の國での奉公人に證明書を與へると云ふ事があるさうで御座います尤も是の政府から命じた法律でないホンの一商家又一會社の適宜に設けた規則で御座いますけれども其證明書と云ふの例へば茲に一人の小僧があつて此小僧が五年或ひは七年の年季を終つて出る時に其主人から此者の年季中都合の行爲の無かつたと云ふ保證書を出すので御座いま

す又た年季中でも止を得ない事故があつて暇を取に致せ其者に不都合さへ無ければ證明書の與へます故に暇を取て後に又他へ勤めるにせよ雇主の其證明書を信じて雇入れますから本人の信用も厚く又雇主の方でも誠に世話が無いさうですが成程さう云ふ規則があると奉公人も不正直な事へ出来ず又神妙又勤め果ふれば夫が立派な履歴と爲て我一身の光輝の棺桶の御厄介にあるまでピカ／＼するのですから誠に是の良法立で御座います何卒日本でも斯云ふ規則を設けたらば今の奉公人の弊害も無くなり雇主の方でも安心して人が使へるだらうと思ひますが如何で御座いますせうか(大喝采)

### ○第十六席 奉公人の目的

昔時の奉公人が首尾よく年季を務め上ると主人の方でインテリか資本を遣つて治郎相當の店を出させる様を法立もあつたので御座います今此

法立も消えて仕舞つて年季が明けても一切お構ひあしでアバヨと遣るか奉公人の方でも風呂敷包を背負つてハイ左様あらと出て行くの誠下手輕で宜やうなもの、實の人情が薄く成つたのかと思ひます(ヒヤ／＼)夫から暇を取て歸つてから何するかと思ふと今まで酒屋に奉公した者が餅屋にあるやら昨日まで呉服屋に居た者が今日の天秤棒を肩にして大根牛房を賣歩く或は按摩の手引をする者もあれば私窩子の宿引をする者もありイヤ真逆に其様事もあるまいけれども何に致せ年季で覺え込だ業を以て飯を食て行ふと云ふもの十八人の中で僅か一人あるか無しで御座います元來年季奉公と云ふもの何の爲にするので御座います例へば菓子屋から菓子屋酒屋から酒屋に奉公するの自分其業を覺えて夫で一生涯飯を食ふと云ふ目的で奉公するので御座います然るを年季が明けて後に外の商賣に替つて見ると手もかく永の年月只飯を食して貰つて人の家業を手傳つて遣たと云ふまでの事では是が即ち骨折損の草臥儲け



で御座います故に奉公するから其前に能く目的を借に定め置て年季明の後の必ず其業を以て飯を食て行やうにするが宜アありませんか(大喝采)

○第十七席

女の惚ると云ふのは

今度の道人のガラにない色氣のあるお話しで御座います併し色氣があるからッても何も猥褻な事を饒舌るので有りませんから助倍先生の先づ演説の終るまで涎を垂しより月尻を下たり鼻の下を伸したりする狂言の暫時お見合せを願ひます(謹聴)扱昔しから云ひ傳へる女の惚る法の一金二はど三美男とか或ひの一に根氣二に腕三に男四に金かど諸説區々で御座いますけれども皆其當を得ませんナせ當を得ないと云ふに金にしる程にしる男振にしる之に女が惚たと云へ是は丸で女を瞞着たので御座います殊に根氣とい根氣よく口説のちや爾うですが是は如何も鉄面度の遣方あり又腕とい腕力に訴へるのちやさうですが是は又た法

外の乱暴で御座います好んば右の古風な法で女が惚たにせよ是は只上邊に迷ひ或ひは金が欲さに轉げて來のですから些とも惚たが惚たに當りません(ヒヤ)故に道人が女の惚たと云ふの先づ縷の衣服を着て顔も身体も垢だらけで言葉の遣ひ方も武骨で金と云つたら銀錢一文も無く又跛脚ても片眼でも腹の中に錦を着黄金の光のある人間を撰んで此人からバと惚て來たのが眞に惚られたので御座いますダガ此様な女が當節あるか無いか其處の道人にも分りません(大喝采)

○第十八席

迷ひの説

ア、今日の好天氣だ此好天氣に自家で盆槍して居るのも氣が利かさいがハテ上野へでも行て見やうか知らんイヤ上野へ行たッて何時も同じ事だらうエ、ト向島へ出掛けやうか知らんイヤ向嶋の餘り遠過ぎるしム、楊弓場へ行て少女を愚弄て遣ふか知らんイヤ楊弓場も餘り氣が利かさい寧

そ何處で一杯遣つて來やうかイヤ酒を飲に行にくやア錢が入るハテ困ツ  
た何したら宜からうと色々考へるのを之を迷ふと云ひます尤も是の藝  
者の口車に迷ひ娼妓の手に管に迷ひ私窩子の膏藥臭きに迷ふとの同じ迷ふ  
のでも迷ふ種類が違ひますけれども迷ふの矢張り迷ふので早く云へば  
腹の中に決断と云つて是の力が無から此迷ひを  
生ずるので御座います(ヒヤ)此迷ひと云ふ奴の誠に行んものでパチ上  
野へ行ふかイヤ向島に致やうかと迷ふて居る中にモウ時間が立つて二時  
間や三時間い直無益に潰れて仕舞ます併し是の何せ遊ばふと思ふ時間か  
ら自家で潰しても他所へ行つて潰しても同じ事で御座いますけれど若も  
是夕一身上の目的即ち後來我身の幸福を生出さうと云ふ學術などの事に  
就て法律が宜からうかイヤ經濟學に仕やうか待よ理學が宜か知らん夫と  
も何が宜か是が宜かと色々迷ふて居る中に光陰の鉄砲玉の如くツと  
早く立て仕舞ますから少年の諸君の迷はぬ様に確乎も目的を附けて御勉

強が肝要で御座います(大喝采)

○第十九席

人を正んと欲せば先己を正せ

何だか少し毛唐人臭い云草ですが人を正さんと欲せば先自己を正せとの  
實に格言で御座います諸君試みに思ひ給へ自分の毎日毎晩酒ばかり飲で  
ノラッラ怠惰で居りながら他人の酒を飲のを見て手前の全体酒に呑れる  
性質で酒を飲と何も乱暴で行かいかから酒の以來廢止して仕舞と云へば其意  
見を云はれた男の之を尤もの事として酒を廢止るで御座いますか否廢  
止處か却つて口を尖しン酒を廢止して仕舞が聞て呆れらア赤ン辨慶屁で  
も景清だ人の頭の蠅を追ふよりか自分の質でも受出す工風をするが宜と  
云ふで御座います(ヒヤ)さう云はれて見ると折角人の爲を思ふて云  
つた事が何の益も立ません否何の益にも立ない斗りであく却つて怨み  
を受け或いは笑はれて取も直さず我身一人の敵が殖たやうな姿で御座

います故に酒にしる女郎買にしる藝者遊びにしる私窩子這入にしる勝負事にしる何にしる彼にしる人の横道へ這入のを呼戻さうと云ふに先づ自分から真直を本道を歩行て見せなければ成ません殊に上の爲す所下これに倣ふ諺の通り雁が飛べば鳩も真似をして飛たがるもので御座いますから人の風上に立つ者の猶更注意せねばありませぬ(大喝采)

○第二十席

人の屑

諸君彼のお三どんが竈の下に用ゆる所の焚付とい何で御座いませうか即ち是れ木の屑で御座います諸君彼の權助が尻を拭に用ゆる所の漉替しとい何で御座いませうか即ち是れ紙の屑で御座いませ而して此屑とい何の事かと云ふに其物の何たるに拘らず總て殘物の益に立たい物を指て云ふ極々下等の名目で御座います(ヒヤ)然れども屑も屑に依りけりで随分其用ひ方に依てい益に立つもので御座いませけれども只何の益にも立た

いの人間の屑で御座います(ヒヤ)息學に曰く漉替し千枚惟民の使ふ所と又曰く片々たる焚付竈孔に燃ゆと又曰く用ゆる所に於て其用ゆる所を知る人を以て屑に如ざるべけんやと成程物の屑の川ゆる所に依れば益に立ますけれども人の屑の皆無益に立ませんと云つたら盲目や片眼や雙や啞や跛脚や蹙や出愚の坊や其他種々様々の癡人の皆か道人を責めて人の屑とい定めし我々の事を云ふのぶらうと眼を剝出し齒軋をして怒られるだらうがイヤ道人の懲兵令の免役に屬する癡人かどと人間の仲間へ入れて人の屑とい申しません然らば人の屑とい何様か人間を指て云ふのかとお尋ねあらば道人の之に答へて云はんとす道人が人の屑と云ふの無氣無力の卑屈人間で御座います(大喝采)

○第廿一席

色氣より食氣

色氣より食氣と云ふと大層下司張て居る様ですが之と体裁よく奇麗に云

ひ直した處が花より團子とでも云ふより外ふ仕方が御座いませんツマリ  
 哇を行のも田を行のも落附處の同じ事ですから道人の行成り色氣より食  
 氣と無造作に擔ぎ出したので御座いますすが扱諸君この人間と云ふもの  
 色氣があつて而る後よ食氣がある者で御座いませうか但し又た食氣が  
 つて然る後に色氣がある者で御座いませうかと諸君にお尋ね申したら  
 夫やア十人十色で諸君の中でも色氣が先だと云ふお方も有りませうし又  
 食氣が先だと被仰るお方もありませうけれども此處の議論する場所での  
 有りませんから道人が獨りで決を取つて獨りで旗を掲げてお目に掛ます  
 が道人の思ふにドゥしても人間の食氣があつて然る後に色氣があるの  
 で御座いませう其証據のオギヤ〜と此裝束へ出て來ると行成り乳へ執  
 着の一事を見ても知るべきで御座います(ヒヤ〜)夫から段々と成長する  
 に随つて美衣服も着度なる別嬪の顔も見度あるのですが如何に美衣服が  
 着度からつて活人形ぢやアあるまいし食ふ物を食はせよ衣服ばかり立派

に着て居る譯にも行きますまい又何様かに惚た女だからつて飯も食すに  
 抱て寝て居る譯にも行きますまい夫だから古人も花より團子と云ひました  
 が成程夫に違ひないイッラ向島や上野の花が奇麗でも空腹を抱へて人の  
 愉快に涎を垂しおがら益槍して見て居たからつて些とも面白くも可笑く  
 も何とも有りませすまい然るに近頃の妙お人間が多くあつて食ふものも碌  
 に食すよ立派お着物を着たり大切お身代を棒に振つてまで藝者を女房に  
 去たり米櫃の空虚の癖に腐り媚妓を引張出して互ひに面を眞蒼にして  
 眼玉ばかりパチンリ〜遣つて居る者がありますが此奴等の色氣を知て  
 食氣を知らない丸で狂人イヤ正氣の沙汰ぢやア御座いませんね(大喝采)

○第廿二席

書家の衰頹

負惜みを云へば書家の姓名を記すに足るとか何とか胡麻化して居ても濟む  
 やうなものゝ實の處の蚯蚓の行列か釘箱を引揉返したかと云ふ様お書様

よりのズツトから懸腕直筆とか何とか云ふので筆を揮へば紙に聲あり王  
 義之も趙子昂も糞一喰へと遣り度もので殊に自己の書家だ字を書の専  
 門ぶぞと看板を掲げた人の猶更旨く遣つて貰ひ度もので御座います(ヒヤ  
 ヒヤ)併し旨く書と云つたからって只懸腕直筆だの永字八法だのと口の先  
 ばかりで小理屈を並べて提燈屋の少し毛の生た位に字の見恰好を能く書  
 たとて夫で能書家との云へません己に毛唐人も書六藝の一として立派  
 ち技藝の中に算へ込で居るし又當今の西洋風で行ても美術と云ふ位も  
 ので御座いますから同じ字を書たにしろ何處となく高尚な氣韻と云ふも  
 のも無くて行ず又氣象と云ふものも無くて行ません(ヒヤ)然るに  
 今の書家の書た字を見ると只字が行儀よく並んで居る形容が旨く出来て  
 居ると云ふまでの事で氣韻や氣象の扱置き之を評すれば燈心の三杯酢と  
 でも申しませうか(ヒヤ)お負に手本を書ば主人相識すの唐詩選に永和  
 九年歲癸丑に在と云ふ古文眞寶の拔萃夫から天地玄黄の千字文と大畧相

場が極つて居るのですから是れで盛んに爲りやう筈が無いで御座いま  
 せうイヤ盛んにあらない處でい今この書家の有様と云ふものゝ實又氣  
 の毒お程の衰頽で肝心お餅屋の看板を酒屋の方の官員さん方に奪はれて  
 仕舞て居ります(ヒヤ)と云つたら書家先生のヤツキと爲つて此瓢床道  
 人め何を云ふ手前の氣でも狂ひいせんか駿馬も時に合されバガタツリ馬  
 車を挽き裏店のお茶ッ非娘も運が宜ければ黒塗の人力車に乗るでい  
 か今の書家も其通りでイクラ立派な腕前があつても時機に逢さア仕方  
 が無い彼の官員の書おどの書法も知らず無鉄砲を書ものを夫を宜事と思  
 つて居るとい誠に困つた盲目世界だと云はれるに違ひないが成程それ  
 日明世界か盲目社會か其様お醜の暫く置いて道人が公平お眼玉を以て見  
 る時の何分にも今の書家の學問が無いから書た字にも直打が  
 さい(ヒヤ)道人が先日も或田舎へ行って旅籠屋へ泊つた時に其唐紙の東  
 京にて指折の或書家先生の書れた者で御座いましたが夫を見ると四君子

の詩を一枚宛に分て書れたものと見えて墨蘭墨菊墨梅までの宜が最一枚の竹枝と云ふのが有りました道人のハテナと思つて其詩を讀で見ると正しく森春濤翁の新瀉竹枝で御座いましたたがナント諸君有名の書家で有りあから四君子の中へ竹枝体の詩を交て書て如何改良流行の今日でも餘り改良し過るで御座いませんか(ヒヤ〜)オット餘り長くありますからモウお仕舞に致しませう併し是でお仕舞にして只書家の悪口を云つた計で何の功能もありませんから一寸一口申しませうが此衰顔を回復すに最少し學問と云たら宜で御座いませう(大喝采)

○第廿三席

未來記

外國人の能く未來の事を云ひましてヤア何年何月に何世界が顛覆るのヤア何時の耶穌教の信徒の天へ昇つて跡に残つた者の皆死で仕舞のど色々も法螺を吹ますけれどもツイド當つた事の御座いませんが道人の此未來

記の氣象臺の天氣豫報よりの最ツツと旨く當てお目に懸けます尤も餘り

先の事を云つても無益ですから一寸一年先の事を云バ先づ斯で御坐ます

一 本年の梅雨の毎日〜淋病やみの小便のやうに雨が降て色々の物も

皆鬱が生じますから用心なさい(ヒヤ〜)

一 本年の夏の例より熱くつて凌ぎ兼ねるけれども裸体で往來を歩行バ巡

査さんに叱られます尤も氷水一杯一錢で御座いますから餘り暑い

時々の一二杯ツ、お呑あさい夫からヒヨットすると虎列刺病が流行

するかも知れませんから其前から食物に氣をお附あさい(ヒヤ〜)

一 夏が過ると又ツロ〜涼風が立て來ますから着物の用意をしてお置

あさい(ヒヤ〜)

一 涼風が段々寒風とある頃にはボツ〜火事が初まりまそから火の用

心を成さいまし(ヒヤ〜)

一 十二月の願詰りを大晦日と云ひます此大晦日にハ屹度借金取が責め

て來ますから是も前以て用心をしてお置きなさい(ヒヤ〜)  
一大晦日を過ると明治廿三年とあります此年に初めて賣出す新聞紙を  
初摺と云ひますが此新聞紙に皆今年ハ國會が開られるので目出度  
目出度と書きます(ヒヤ〜)

一月から十二月までの間にハ必らず國會が初まれますが此初めて國  
會の開ける日にハ憲法發布の日の様にお祭をして日本中の人が祝ひ  
ますから其時にハ各自に踊ったり跳たり成さいますし(ヒヤ〜)  
まだ此外にもお知らせ申す事が澤山御座います之餘り長くありますから  
先づ此位にして置ませう(大喝采)

○第廿四席 有名無實の説

有名無實と云ふのハ名目ハあつても其名目だけの証があるといふ事御  
座います故に幽霊と云ふ名があつても誰も幽霊を見た事が無ければ即ち

是れ有名無實で御座います又河虎の尻と云ふ名があつても誰も河虎の  
尻を嗅だ者が無ければ矢張り有名無實で御座います(ヒヤ〜)故に殿様と  
云へば殿様だけの實が無くてハ殿様でなし奥様と云へば奥様だけの實が  
無くてハ奥様でなし御新造様と云へば御新造様だけの實が無くてハ御新  
造様でなしお嬢様と云へばお嬢様だけの實が無くてハお嬢様でなし旦那  
と云へば旦那だけの實が無くてハ旦那でなし内儀さんと云へば内儀さん  
だけの實が無くてハ内儀さんでなし番頭と云へば番頭だけの實が無くて  
ハ番頭でなし其外權助ハ權助ハ三ハ三小僧ハ小僧俳優ハ俳優相撲取ハ  
相撲取醫者ハ醫者坊主ハ坊主職人ハ職人學者ハ學者畫工ハ畫工按摩ハ按  
摩車夫ハ車夫乞食ハ乞食泥坊ハ泥坊巷賊ハ巷賊イヤ泥坊や巷賊ハ餘り實  
のあい方が宜が前に云ツゝ類の立派な名目を持つて居る者の皆夫れ相應  
の名目だけの實が無くてハ成らぬ譯でありながらドウも此節ハ其名目  
やどに實がある様に思ひます殊に藝者やどの其中でも有名無實の隊長で

御座いませう(大喝采)

○第廿五席

ビール人間

ビールと云ふ酒の今日日本で製造が出来ますけれども其初めの西洋から舶来して参った洋酒の一種で御座います。此ビールと云ふ酒の色こそ馬の小便見た様で御座いますけれども中々向ふ氣の強い奴で平生ビンの中に居る時の只馬の小便然として落イ附て居ります。若も此頃の口に箆てある栓を引扱と行成り自由く、でいあいヂユウくくくと泡を吹出します。ケレども是のホソノ一時の事で何時までも泡を吹出して居る譯での御座いませぬ之を打棄つて置く。と暫時の間に復た元の馬小然と爲つて仕舞ます。故に道人の一時只ワイくくくと騒いでも其後の消ぬて仕舞人間を稱してビール人間と云つても宜からうかと思ひます(ヒヤく)諸君……諸君も定めし記憶せらるゝで御座いませう。今を距る事八九年前権兵衛も

八兵衛も國會くくと無茶苦茶に騒ぎ立ました事を而して其頃の遠國から能々東京へ國會の請願に出て來た人もあり又地方での政黨の組織に盡力する人も澤山あつて随分民權家の鉢合せをする様も最も隆盛ある有様で御座いました(ヒヤく)然るに其隆盛ありと思ひし、のホソノ僅の間の事で己に今日の國會の開設も眼の前に迫りあがら彼のワイくくくと騒ぎ立たる政黨の火の消たる如き有様あるの恰もビールの口を抜しとき、の非常の勢ひでありあがら直に元の姿に復ると同じ様かと思ひます(ヒヤく)又彼の長崎事件の如きノルマントン沈没事件の時の如きも其初まりの非常の勢ひでワイくくくと騒ぎ立あがら其事件の未だ落着に至らざる前に早既に何の音沙汰もなしと成が如き、の是またビールに似たる處がある様に思ひます。此の如く只ワイくくくと無茶苦茶に騒ぎ立て直に消失して仕舞ふ人間を稱してビール人間と云ふの、の強ち出鱈目での無からうと自分丈で信じて居ります(大喝采)



○第廿六席  
堪忍の説

堪忍の出来る堪忍誰もする成らぬ堪忍するが堪忍との世人が能く引合ふ  
出す處の堪忍の原則で御座います又毛唐人國の韓信と云ふ人の市人の股  
倉を潜つて一時恥の搔たけれども仕舞に素敵滅法界な豪傑に爲つたと  
云ふのを手本にして堪忍の仕さければ成らぬと云ふの十人が十人能く  
云ふ事で御座います成程韓信と云ふ人の感心する人で御座います感心さ  
人での御座いますけれども是が仕舞に一世の豪傑に爲たから宜やうさも  
の、若も是が豪傑に爲らなかつたならば恥の搔損で済むで御座います  
然から韓信の後に幾人か股倉潜りが有つたか知れませんけれども皆恥の  
搔損で人の手本とあるべき堪忍をまたのハッタ韓信獨りで御座います  
(ヒヤ)故に堪忍のそべしと云つても強ち韓信の真似も出来ません殊に  
成らぬ堪忍を爲るのが堪忍だと云つても男と生れた者が他人に頭を張倒

されても堪忍して居る足で蹴飛ばされても堪忍して居ると云ふ様での餘り  
活智が無さ過て二ツの翠丸に對しても誠に申し譯のさい次第で御座いま  
す(ヒヤ)尤も一人一個の上の事さらば活智を堪忍強いと辨護して  
も濟むやうさもので御座います若し國と國との關係の時に先方から何  
様も無理を仕向けて來ても何様も小馬鹿にして來ても只堪忍くとば  
かりでハイ、頭を下げて居た日に大切な國も滅茶苦茶にされて仕舞  
ます(ヒヤ)人の身の上も此通りで只堪忍くと云つて居れば人に活智  
あしと見込れて好自由に瞞着されて仕舞て頭の擧る時が有りませんから  
堪忍の仕さくても成ませんが堪忍の出来る堪忍を無理に堪忍するにも  
及ませぬ故に道人の古人の歌又改良を加へて「堪忍の出来る堪忍するが  
よし成らぬ堪忍するに及ばず」としての諸君如何です(大喝采)

○第廿七席  
浮世の夢の如し

李り白はく曰いはく光陰くわういんの百代ひゃくたの過客くわかく浮世うせいの夢ゆめの如ごとしと朱熹しゆきの詩しに曰いはく未だ覺あず地ち塘たう春草しんそうの夢階ゆめか前の梧葉こもぎ己おのれにと如何いか様さま長ながい様さまで短みじいのの人生じんせいで御座ございます  
(ヒヤ) 此間このあひだオギヤアと生うれたと思おもふ女おんなの子こがモウ情夫じやうふを拵とへて逃にげ出だすやらツとイ此頃このときまで飴賣あめうりの尻しりに附つて駈かけて居ゐたと思おもふ男おとこの子こが何時いつの間まにか腐くれ女郎ぢやうぢやうに首くびツ丈たはまり込こみ昨日きのうの花嫁はなよめさんも今日けふの梅干婆うめはなばアと奇きり一昨おととい日の業平なりひら男をとこも今日けふの皺しわ苦茶くちやの齒は抜ぬきとある實たつは浮世うせいの夢ゆめの如ごとくで御坐ございますト氣きが附つて見みると中々なかなか迂濶うかつして居ゐられぬ次第しだいですと誰たれでも口先くちさきでの浮世うせいの夢ゆめの如ごとしとか光陰くわういんの尻玉しりたまの如ごとしとか人生じんせい僅わずか五十年ごじゅうねんと云いッて其邊そのへんにの万々ばんばん抜目ぬきめの無ないやうの事ことを云いへと其實そのじつ月日つきひを惜おしんで勉強べんきやうする人ひとの少すくない者もので御座ございますねへ諸君しよくん(大喝采)

卒

○第廿八席  
花を觀るの鍼

何なにです今日けふの實じつに好天氣いんてんきでのありませんか斯いか云いふ日ひに一瓢ひやうを肩かたにして向むか

島しまを散步さんぽするさどの随分ずいぶん悪わるくのありませんねへ左様さようサ此鹽梅このあんばいぢやア上野うえののモウ満開まんかいでせう實じつに堪たへられませんねへ如何いかです寧いづその事こと正午せいごから出で掛かちやア至極しごく賛成さんせいですねへ併ひし同おなじ花はなを觀みるから上野うえのばかりでも少すくし興きやうが薄うすいから上野うえのを見みて夫それからズと向鳴むかよへ廻まらうぢや御座ございませんか  
『如何いか様さまそれの一入ひとしほの興味きやうみでせう何なにに致いたせソロと支度しだして出懸でかけませうト陽氣やうきに絆はたされて浮々うかと飛出とすのの吾われも人ひとも大抵たいてい同おなじ様さまを趣おもひで御坐ございますが其陽氣そのやうきに絆はたされて浮々うかと飛出とした處ところで去年きょねんの梅うめの樹きへ桃ももの花はなが咲さいたが今年ことしの桃ももの樹きへ梨なしの花はなが咲さいたと云いふ譯わけでもあく櫻さくらの花はなの矢張やはり去年きょねんと同おなじ様さまに櫻さくらの樹きに咲さいて居ゐるので何なんにも別べつに珍めづしくも何なんとも御座ございませんケレども花はなの相變あひかはらず立派りっぱに咲さいて居ゐります(ヒヤ)ソと此花このはなを見みに行いつて奇麗きれいだとか面白おもしろいとか云いふ人ひとを願ねがひると五年ごねん跡あとに來きた八兵衛へいべの矢張やはり八兵衛へいべ三年前さんねんまえに見みた七兵衛しちべの相變あひかはらずの七兵衛しちべで五年ごねん跡あとに來きた時ときの歸かへり掛かに芳原はなはらの夜櫻よざくらと洒落しやれ込んだ者ものが今年ことしの子供こどもの手てを曳ひて來くる三年前さんねんまえに

大道を踊りあがり歩行た者が今年杖に縋って人を除けて歩行と云ふ有様で年々歳々人同じからせ只空に歳を取る計りで何年立ても其身に一輪の花も咲ささい癖にヤア此花の美の此花の悪いのと勝手な囃言を突て居るので御座いませ何が何と云ッても花の方で黙止て居るから宜けれども若も花が口を利たら可笑あもので御座いませうねへ(大喝采)

○第廿九席

風流の真似

落語家の前座の話しに或無雅不風流の老人が向島の別荘へ隠居して人が遣るから自己も抹茶を遣つて見やうと思ふたけれども今まで風流の事と云ッたら何一ツ手懸た事が無い故抹茶を遣るにしても肝心な種を知らあい處から色々考へて青黄粉を茶碗に入れ之を引搔廻して客よ呑したと云ふ事を能く饒舌りますすが是が即ち風流の真似で御座います(ヒヤ〜)元來風流と云ふものの詩歌俳諧にしる抹茶活花にしる之を遣つて見やうと

云ふのの自分に風流を好むの性質を備へて居ればこそ面白い様あもの人が歌を咏から自己も歌を咏で見やう人が花を挿るのに知らぬと云ッての外聞が悪いから自己も花を挿て見やうで丸で風流の真似で人の樂みの道具を遣う風流が其身に取つて却つて苦しみの種と變じて仕舞ます(ヒヤ〜)然るに世の中に妙あ人間の有つた者で道人の知己の中あども自分何にも知らあい腹の中空虚の癖に風流の仲間へ首を突込で詩でも歌でも皆人に代作を頼んで夫を我物顔に自分の名を附けて人よ誇つたり或ひの諸雜誌中へ郵券の自腹で投書えたりして鼻をピコ附して居る者がイッラもありますすが是で只風流の面を被つて居ると云ふ丈の事で肝心を自分の樂みにい些とも成ませんイヤ樂みに成らあ計でなく實に良心に對して恥かしい譯で御座いますから此様あ風流から寧その事化の皮の剥れあい中に廢止て仕舞た方が却つてお身の爲で御座いませう(大喝采)

○第三十席

山師論

世人の濡手で粟の握み取をせんと欲する者を稱して山師と云ひまそが此様を横着る奴にナゼ山の師あど、秋葉三尺坊然たる名を附たて御座いませうか道人にも其譯が分りませんゆゑ色々の書物を取調べて見ました處が或時デメラメー氏が著せし所の萬國奸商史と云ふ者を讀で略其の譯を知りました(謹聽)其書中に云ッて有りますのに紀元苦百年代の頃亞細亞の東部和留智惠國に奸商人野惡藏と云ふ者がありましたが一歳の事其都府に大火事がありました其時彼の惡藏の大勢の柵を伴れて直に某山に駈つけ其山の材木を二束三文に伐出して來て一時に素敵を金儲けをえた處から山師と云ふ名が初ツたのだと書てありました又一説に大いある山岳を空中に築と一般の大法螺を吹て馬鹿を躰穿に懸んとする者これを山師と云ふとも云ひますが夫の何方に致せ之を要するに山師と云ふ譯の資本を出さず骨折をせず只握り拳を以て大金儲けをせんと欲する者を云

ふので御坐いませう(ヒヤ)夫れ資本を出さず骨折をせずして巨利を握む者の即ち是れ只儲け丸取で御坐いませ世間には随分商法の多いけれど只儲け丸取ほど奸商法の御坐いません然から資本を出さあいで誰よでも只儲けが出来るあらば是れと結構を事いから道人あどの第一番も鉢巻して取掛りますすけれども利の報いと云ッて骨を折り勉強をせられ金の儲かる筈が御坐いません或人の泥坊や巷賊を資本入らずの只取商法だと云ひますけれども是れ逆も命と云ふ資本を入れて人の目を偷んだり土藏を破ッたりするの一方から骨折だらうと思ひます(ヒヤ)夫此の如く泥坊や巷賊でさへも勞力を費し大切を命に懸けてする及の世渡りを山師の何の屁とも思はせ握り罫丸をして無資無勞の中に金儲けをするとの實に泥坊巷賊の上前を取ると云ッても宜位の並々の人間で御坐いません己に並の人間で無いとして見る時の逆も我々の正直者が真似をまたからッて其真似が出来べきもので御坐いません(ヒヤ)

然るを近頃の人間の大層慾張て居りますから動もすると山師の真似をして身代を棒に振る者が往々御坐いますが無人に限らば本當の慾があつて本當に金が儲け度と思ひ利の報と云ふ事に口を附て神妙に稼ぐのが何より第一の上策で御坐いませう(大喝采)

○第三十一席

馬の耳に念佛

諸君よ馬の耳に念佛と云ふ事の世人が常に能く云ふ文句で御坐います。全体此馬の耳に念佛とい何様か解釋を下して適當で御坐いませうか道人が例の故事附理屈を以てこれを講釋するときは蓋し云つても役に立ない。イッラ饒舌つても先方へ通じないと云ふ事で彼のお俊が夫りや聞えませぬ。傳兵衛さんと云つた意味で御坐いませう(ヒヤ)而して何故また念佛を此處へ擔ぎ出したかと云ふに坊さんに念佛の講釋をさせると夫れ念佛を一たび唱ふれば五逆も爰に消し十惡も茲に滅す杯と云ひますが道人の

全体阿房多羅經の外に經文を知りません。果して五逆が消るか十惡が滅するか其邊の甚だ不案内で御坐いますけれども兎にも角にも南無阿彌陀佛の六字の佛學の大眼口方便の因つて起る所で御坐います(ヒヤ)故に老耄爺が後生を願ひ強慾婆アが未來を待むる座つても南無阿彌陀佛起ても南無阿彌陀佛屈を放ても南無阿彌陀佛欠伸をまても南無阿彌陀佛轉んでも南無阿彌陀佛風邪を病ても南無阿彌陀佛と只毎日毎晩夜も晝もノベツに南無阿彌陀佛を口に唱へて居りますけれども扱この南無阿彌陀佛の六字の何等の功德が御座いませうか彼の老耄爺が後生を願ひ強慾婆アが未來を待むるのに功德があるにせよ我々の身に取つて何の功德も御座いませんから先づ此念佛を無益の事と道人の見做ます(ヒヤ)ソコで又馬と云ふ奴の畜生の中でも一番馬鹿あもので御座いますから其馬鹿あ馬に向つて無益の念佛を唱へた處か何の感覺もないと云ふ事の二尺五寸の鼻垂小僧でも能く知ッて居る御座いませう。語に曰く花柳の情の石

部金吉と語るべからず勉強の事、野良倉治郎と談すべからずと成程尤も  
 の云草で御座います(ヒヤ)今夫上戸が下戸に向つて酒の味ひを説も下  
 戸が上戸に向つて菓子甘味を話すも双方とも何の感じも無い處が即ち  
 馬の耳に念佛で御座います爾して馬の耳に念佛の音に是ばかりであく甲  
 が乙に向つて喋々と民権論と主張しても乙にして若し官権黨から馬の  
 耳に念佛とあり丙が丁に向つてベラと自由説を饒舌しても丁にして  
 若し壓制主義で有つたあらば是亦た馬の耳に念佛で決して其功能の無い  
 もので御座います(ヒヤ)夫れ然り然るにイヤ其様さに切口上で出掛あ  
 くても宜が世人の常に此馬の耳に念佛と云ふ事を口に云ひながら兎角に  
 酒屋に向つて餅屋の講釋を爲し大工に向つて左官の事を説く様も見當違  
 ひとする人が往々あります之を説も無益と思ひ之を饒舌るも功能があ  
 りと思へば寧ろ何とも云はあい方が宜かと思ひます(大喝采)

○第三十二席

媚の字の辨

諸君……諸君も御存じの通り今日世上に於て用ゆる所の文字、日本出  
 來支那出來とを合併すれば其數の何億何千万何千あるか塞の河原の小石  
 も濱の眞砂も音あらざる位で御座いまして其又た無數無量の文字を一々  
 分拆しますれば或ひに吉に屬する者もあれば或ひに凶に屬する者もあり  
 又た色氣ある者もあれば色氣の無い者もありまして善惡醜美各々其意味  
 も違つて居ります(ヒヤ)道人曾て以爲らく此の如く多數の中今日流行  
 するの文字、髯國會民權官權狡猾奸商好色走私奔名權妻鼻下長寐兒點姉  
 まで一々指を折つて勘定する暇のありませんけれども其中に就て流行の  
 最も流行とする者の唯媚の字ぶらうと思ひますエヘン今其媚の字の功能  
 を饒舌つてお聴又達しませう(謹聴)抑々媚の字の功能と云ふの能生  
 が能く之を用ゆれば以て其髯を伸すを得べし商人にして能く之を用ゆれ  
 ば金融茲に開けて以て其業を大いにする事が出來ます又彼の寐兒が痴大

七十一  
盡を擒にして瑤の輿に乗り照姉の愚大人を捕へて錦の褥に登る如きの皆  
も只媚の字の功德で御座います(ヒヤク)又權的の之を以て且突を誑して  
巧に奥様を逐出し狡猾治郎の之を以て鬻氏を胡麻化子て妙に金莖を得る  
かど實に媚の字の功德の大層なもので御座います(ヒヤク)然れども媚の  
字の元來小ある者に利があつて大ある者に利なく賤き者に徳があつて尊  
き者も徳のない者で御座います其譯如何とあらば大ある者にして小ある  
者の媚に罹れば鼻毛と鬢の毛とを引コ抜れ尊き者にして賤しき者の媚に  
陥れば眼玉と膽玉とを弄はれるからで御座います(ヒヤク)併しかがら小  
ある者の太ある者に媚かければ其利を逞しふすべからず賤しき者の尊き  
者に媚かければ其志ざしを遂る事が出来ません故に大たり尊たる者の能  
く用心して小たり賤たる者を避る様にするが宜しいで御座います若し  
然らずして徒らに其飴の如き甘言を聞き蜜の如き美言を信じ其媚を喜ん  
で警戒する處が無かつたらば必ら其術中又陥つて馬鹿を見るに至り

ます(ヒヤク)語に曰く笑中に劔あり談裏に刃を藏すと蓋し亦た媚の畏  
るべきを謂ふので御座います是に因て之を觀る時媚の字の大層功德  
がありまされども其功德の却つて惡徳で無いかと思ひます(ヒヤク)  
而して今日媚の字の社會に流行するの誠に盛ある事で一にも媚二にも媚  
噓をしても禮を云ひ尻を放てもお辭儀をし必らず媚を以て人を欺き媚を  
以て己れを利せ様と云ふ有様で御座います嗚呼この媚の字の有らん限り  
の廉恥の到底元の座への復らぬいで御座いますナント諸君媚の字の實  
に畏るべきで御座いますせんか(大喝采)

○第三十三席  
耳の功能

人への耳目口鼻が御座います尤も耳目口鼻が無くてズンペラボウであつ  
た日よ丸で蚯蚓の化物見た様で御座いますすけれどもヒヤク(マアサ諸  
君其様かにお愚弄の御無用です扱右の耳目口鼻の中で何が第一必要であ

るか云ふに第一の口其次が目其次が耳其次の鼻で御坐います故に古人も口の事に就ては色々小言を云つて居りますけれども跡の三ツに就ては別段小八ヶ間しい小言を云はさいで只耳に淫聲を聴かず目に邪色を見ず鼻に悪臭を嗅ぎオット鼻丈のお負です(ヒヤ)夫から又非禮見る勿れ非禮聴かかれ非禮嗅かかれドッコイ此鼻もお負ですが先この位事で御坐います故に道人の古人の未だ曾て云はさいばらうと思ふ耳の機能を一席お饒舌り致さうと存じます(謹聴)昔し俳諧師が百人一首の歌を十七文字に縮めて「一聲の月が啼たか杜鵑」と遣たら川柳師も負さい氣で「雙のたい有明の月ばかり」と遣つた處が世人の皆一聲のより雙の方に却つて興があつて面白いと云ふので川柳師の非常を評判を取つたさうで御坐います又モウ一ツ有名の川柳に「鶏が欠伸をしたと雙云ひ」と云ふ句が御坐います成ほど耳が聞え無かつたあらば杜鵑がイッラ啼ても何の感じもなく鶏が時を報じても欠伸をした様に思ふで御座いますせう管にこれを欠伸と思

ふのみならず人間にして若し耳が聞え無かつたあらば是ほど詰らない事もありますまい例へば黄鳥が幽谷を出て法法華經を春花梢頭に唱へても耳に其嬌音を聞かざれば何の樂みもなく窈窕たる顔る別嬪が粹を根で都々一咄痴利頓を奥坐敷に謠ふも何の面白味も無いで御坐います(ヒヤ)今夫れ黄鳥の嬌音を愛して風流と爲し別嬪の美聲を聞いて涎を流すもの之を耳に聞いて感情を惹起すからの事で御坐います然れば人間の快樂の耳あるが爲ありと云ふも敢て差支への御坐いますまい去ながら耳あるが爲に快樂の情を惹起せば又耳あるが爲に不愉快の情を惹起す事もある云はずとも知れ切れた事にて喜怒哀樂の随伴するの人生に於て免かるべからざる處で御座います故に同じく耳に聴にせよ聞て心に快きものと聞て心に快くない者とが御座います(ヒヤ)何をか聞て快きもの何をか聞て快く無いものかと云へば即ち前に一例を擧たる如く黄鳥の嬌音或いは美人の歌きどの聞て心に快きもので御座いますけれども之に反して宿



六が濁酒に酔ふて山の神を吐鳴附けるの聲悪車夫が田舎漢を罵詈するの聲別嬪が怪獸の本性を露はして米乱迷を吐の聲弱士が娛愉快筋又耽って恍惚話しを爲す等の聞て心に快くさいもので御座います(ヒヤ〜)然しおがら耳に聞ものを盡く美音美聲に仕やうと云ふ事の迎も出来さいもので御座いますから聞て心に快きもの之を聞き聽て心に快くさいもの成べく聞かぬ様にするより外に仕方がありませんが人間の心持の誰でも同じ様おもので御座いますから自分が耳に聞て快くさい事の人も矢張り快くさいと思ふて之を人に聞せさい様にするが宜しからうと思ひますイヤ何だか修身學の講釋見た様に爲つて來からモウ此邊で止ませう(大喝采)

○第三十四席

相鎚の説

諸君彼の鍛冶屋が鉄を鍛へて種々の道具を製へる時に必要ならず其弟子を片相手に使つてトンテンコン〜と相鎚を打します尤も是は通常の鍛冶

屋に限らる昔しの有名なる刀劍師五郎入道正宗と雖ども一人の力を以て利刀を製する事の出来ません必らず弟子をして相鎚を打しめて始めて其鍛練を得るので御座います(ヒヤ〜)故に相鎚の鍛冶屋の欠べからざる要具にして彼のトンテンコン〜の中に利刀名劍が出来るので御座います

が世の中の事の何又限らる鍛冶屋の相鎚の如く他の助力を借なければ旨く廻りの附さいもので御座います殊に會議だとか或ひは相談事の場合に於ての最も相鎚が必要で御座いますナセ相鎚が必要かと云ふ如何ある高論卓説を持出して之が相鎚を打つ者が無ければ折角持出した高論卓説も滅茶苦茶と爲つて仕舞て到底行はれ難いで御座います然れば會議の賛成者の即ち是れ必要ある相鎚で御座います(ヒヤ〜)又た有難社會の潜り込まんとするにもイッラ獨りでヤキモキ氣を揉でも到底駄目の皮で御座いますから此に至つて又相鎚の打人が必要で御座います其他藝妓にウンと云はせるに先づ待合の主婦をして相鎚を打しめ生娘の袖を引く

に先づお三どんの相鎚を借さるべからず山師の財主を生捕にも亦た必  
 らず相鎚を打つ者あつて之を釣出し紳士の名利を釣にも亦た提燈持をし  
 て相鎚を打しめ賣薬屋の新開屋の相鎚を借り俳優の賣出しの別嬪の相鎚  
 よ由て廣まり藝人の名弘め若衆の相鎚あつて纏り殊に又々書工書家の  
 如きの最も相鎚の必要あるもので御座いまして此相鎚の打ち様で上手とも  
 爲り下手とも爲るもので御座います(ヒヤ〜)扱相鎚の功能の荒増此の如  
 く何事も皆相鎚を債はあければ其事が成就しませんけれども其相鎚にも  
 善悪が御座います又相鎚を打ち損つて飛でもあひ大失敗を招く事も御座  
 います而して此相鎚を打せる者と相鎚を打者との何方が氣が利いて居る  
 かと云ふと打せる方の未だ宜が相鎚を打つ方の役の餘り氣が利ませんか  
 ら諸君も成べく相鎚を打せるとも相鎚を打方の役の成さいます(大喝采)

第三十五席

アベコベの説

アベコベといふ東京の方言で……土地によるとアヤコヤと云ふ處も  
 御座いますアベコベにしるへチヤコヤにしる之を漢語で云へば反對  
 と云ふ事で御座います道人の此反對即ちアベコベと云ふ方言を借りて維  
 新前と維新後の事物にアベコベを生じたる有様を一寸口短に辨じやうと  
 思ひます(謹聽々々)諸君維新前と維新後に於てアベコベに爲つた物の澤  
 山に御座いますが其中でも重立たるアベコベを並べて見ますれば先づ昔  
 しの頭よ烏帽子を被るを禮儀としたものが今の帽子を脱を禮儀とするの  
 一のアベコベで御座います昔しの三十日と云へば闇の夜に限つて居た  
 ものが今で三十日でも満圓のお月様が出るのは是も一のアベコベで御  
 座います又昔しの頭を下るのを禮として居りました者が今の頭を下す唯  
 失敬と云へば夫で済のも一のアベコベで御座います(ヒヤ〜)夫から昔し  
 の髷の生たるを失禮として居りました者が今で髷の長く生たるを貴ぶ  
 の是も一のアベコベで御座います又昔しの不淨として物置でコツソリ糞

て食た牛肉を今での之を滋養として坐敷の真中へ持出して客に食せしむ  
るの一のアベコベで御座います(ヒヤク)其他坐ッて食し禮の變じて立食  
とあり四角お金角が取て圓くあり百藥の長と稱美されし酒も健康の  
害ありと退けられ河原乞食と輕蔑せられし俳優も教導職と貴ばれ天下の  
力士と貴ばれし相撲取の裸体踊と卑められるおどアベコベに爲たもの  
随分勘定の出来ないやど御座います但其アベコベと爲た中でも息子が親  
父に意見し娘が母親を理屈詰にする杯の餘り感心しあいアベコベで御座  
います(大喝采)

○第三十六席  
長命せよ

凡そ此人間世界に生れて來たもの縦ひ娑婆塞ぎと云はれやうが穀潰し  
と云はれやうが其様お事にや構はあい一日でも此世に生て居た方が宜し  
ふ御座いますイッラ利功ぶの才子ぶのと譽られても死で仕舞ての詰りま

せんから長命の仕度もので御座います(ヒヤク)併し長命が仕度からとて  
爾う注文通りにも行ませんけれども未だ生て居られる命を無理に縮めて  
河の中へドンブリコを遣つたり梁へフランコと爲つたりして死るの即  
ち長命の嫌ひお大間拔大ベラボウ大馬鹿者で御座います(ヒヤク)諸君よ  
諸君のヒヤクと仰しやる處を見れば諸君に於ても矢張り此ドンブリコ  
やフランコをして死る者を大間拔大ベラボウ大馬鹿と思はるゝと見ぬま  
すが是を大間拔大ベラボウ大馬鹿と思はるゝから道人の諸君にお尋ね  
申す事があります孟子曰く杖を以て人を叩き殺すも刀を以て人を切殺す  
も人を殺すに於ての同じ理屈だと道人の其孟子の假聲を遣ふのであり  
ませんけれども河の中へドンブリコを極め或ひの梁にフランコして死る  
と身體に不養生をして死るとの違つた處がありませうか彼の孟子の杖と  
刀との理屈から考へて見ると死るの何方でも同じ事で御座います若  
し之を同じ事とした日に爲て見ると身體に不養生して死るのも矢張り大

間拔大ベラボウ大馬鹿で御座います(ヒヤク)道人が曾て數醫者に聞た事  
が有りますが人間の身體の蠟燭の火と同じ事ぢやさうで御座いますナゼ  
蠟燭の火と同じ事だと云ふに蠟燭の火の風に吹るれば直に消るものだけ  
れども能く之を保護すれば何の恙もあらず仕舞まで燈るやうなもので人間  
の身體も能く平生に衛生に注意さへすれば何の恙もあらず定命だけの生て  
居られるものだから人命の恰も蠟燭の火と同じ事ぢやさうで御座います  
(ヒヤク)ソコで人間の定命と云ふもの何年生るのが定命で御座います  
うか古人の五十年と相場を附ましたけれども道人の決して五十年が定命  
との思ひません其証據に七八十歳にして猶ピンピンと達者ある者あり  
或ひの百歳以上生る者もあり稀に竹内宿禰の様に三百歳以上生る者も  
あれば御座います然れば人間の定命と云ふもの實際何年だか分りま  
せんから命の欲い人の能く衛生に注意して成べく長命を被成ませ(大喝采)

○第三十七席

一致の説

諸君よ諸君の彼の日本第一の高山たる富士の山を何から成立たものと思  
はれますか此の如く高しと雖も其元を質せば唯僅ある土石の集合より成  
立たるもので御座います諸君よ諸君の彼の世界に有名なる太平洋を何か  
ら成立たものと思し召まそ此の如く深しと雖も其元を質せば唯僅ある  
水分の集合より成立たるもので御座います而して其土石あり水分あり集  
合するもの即ち土石水分の一致したるもので御座いますナント諸君一  
致の力の随分大いある者で御座いますせんか(ヒヤク)又これを小にして  
云へば彼の蟻を御覽じろ蟻の人間の目から見れば實に爪の垢やどの動物  
で御座いますけれども多數の蟻が協力一致すれば己が身體の百千倍もあ  
る梨子の心を我巢よ引去るで御座いますせんか又彼の蜜蜂を御覽さい  
蜜蜂の人間の目から見れば實に鼻糞ほどの動物で御座いますけれども多  
數の蜜蜂が協力一致すれば己が身體の何万倍もあるべき蜜の巢を造るで

の御座いませんの(ヒヤク)故に此一致と云ふ事の人間社會に於ても最も必要な事で御座います今夫れ一國心を一致せざれば國亂れ一家心を一致せざれば家齊はざるの道人が物新し氣にか饒舌りを仕つら無くつても知れ切た事で御座います然るに兎角この一致と云ふ事を棚の上へ放り上げて置て父子相争ひ夫婦掴み合ひ兄弟睨み競をして一家を乱脈にする者が世間にハイツラもありませんが是等の無茶苦茶連中の蜜蜂や蟻も對しても恥かしき次第にて万物の靈と云ふ名目の何處へ持て行て粘着ませうか實に粘着場處が無いでの御座いせんかト云ふもの、是の道人一個の屁暮理屈ゆゑ若しも之に反對の人あつてエ、面倒臭い餘計をお世話だと云はるゝ人あらば道人も面倒臭いから何とも申しませぬ(大喝采)

○第三十八席

不倒翁の説

何物に限らず漢語で云ふと俗語で云ふとの大層を違ひなもので例へば金

策と云へば一寸体裁が宜やうでも金を工面すると云ふと何だか氣が利か  
いやうに聞かれます又空腹と云へば左程聞苦しくも無けれど腹が減て溜ら  
まいと云へば餓鬼道から日附にでも來たかと云ひ度ある様ももので御座  
います(ヒヤク)此演題も右申す通りで不倒翁と云へば何だか小六ヶ敗尻  
理屈でも擔ぎ出すやうですが是も俗語に翻譯して云へば彼の小守が唄ふ  
寝ね兒歌の起上こぼしに犬張子と云ふ其起上こぼしで御座います又彼の  
判間が坐踊に謠ふ文句の餘り神氣くさゝに棚の達磨さんをナヨイト郵し  
と云ふ達磨さんで御座います夫をナゼ又不倒翁と云ふ小六ヶ敗名を附た  
かと云ふに此起上こぼし何様かに轉ばしても其様に頭を張飛しても決  
して倒れまいからで御座います(ヒヤク)夫れ此の如く轉ばしても頭を張  
飛しても倒れまいの何故かと云ふに其頭が軽く其尻が重いからで御  
座いますそれと之を倒すにハ倒す法がありますから其法を用ゆれば屹度倒  
れます而して其倒す法の何すれば宜かと云ふに造作もまい事で御座いま

八五  
す諸君試みに銅貨一錢を以てテヨイと頭へ載て御覽あさい尤も一錢で行  
あければ三錢でも四錢でも載て御覽あさい爾すれば如何に強情も不倒翁  
でも屹度打倒れます(ヒヤ〜)諸君…諸君は是に至つて如何ある感  
情を惹起されますか感情あつて錢足すと駄洒落處での御座います(ヒ  
ヤ〜)アハ、ハ、ハ、ハ、ソコで道人の思ふに不倒翁の打倒れるの勢ひ止を  
得ざる又出るので御座いますから敢て怪むに足しませんけれども頭あり脚  
あつて天を戴き地を踏の人間にして殆ど之に類する者が御座いますは是  
亦た勢の止を得ざるに出ると謂ひませうか人間も其頭が軽くして其脚の  
重い者から金の爲に倒れても宜しけれど元來人間の重する所の頭に在て  
脚にあるので御座いませんから如何ほど金を頭へ載ても倒れると云ふ  
譯の御座いますまい併しあがら其倒るゝ人が若し頭重く脚輕し故に能く  
倒るゝと云はるゝあらば道人の何とも申しません唯金の量の中の奇態を  
ものごとと云ふばかりで御座います(大喝采)

### ○第三十九席

#### 泣ッ面よ蜂

諸君泣ッ面に蜂とい何の事で御座いませうか夫れ蜂の尻にある針の甚だ  
鋭いもので御座います此鋭い針を以て人を螫ハ人の必らず痛いといひま  
す蓋し人の性として悲みわれバ泣き愛ひわれバ泣く者で御座います尤も  
笑ひ泣き嬉し泣きと云ふ事もありますけれども是の本泣でのありません  
から別物とした處で彼の本當に泣くの不吉に屬する者で御座います其不  
吉ある泣面をする時に蜂が飛で来て之を螫ますれば即ち悲みに悲みを加  
へ憂ひに憂ひを増ます其悲みも悲みを加へ憂ひに憂ひを増す事を稱して  
泣ッ面に蜂と云ふので御座います言葉を換へて之を云へば重荷に小付と  
でも申しませうか(ヒヤ〜)人間万事塞翁の馬とやらで禍ひと福ひとの絢  
る繩の如しとい云へ之を實際に照せば未だ必らずしも然らざるものも御  
座います例へば運が開ける日にあるとト〜拍事に行る事爲を事皆思

ふ通りと成り彼の金錢の如き求めずして自然之を得る事が出来ず  
けれども之に反してトク／＼拍子に運が悪くあれは行ふ事爲す事が總て  
鷄の嘴の齟齬とあるのみならず一事を初むれば一事潰れ一業を擧れば一  
業廢れ苦中に苦と生じ辛中に辛を醸す者比々皆これ御座いますは是の  
理外の理とでも云ふべきか知りませんが是が即ち泣ッ面に蜂で  
御座いませう(ヒヤ／＼)又彼の商人が一朝相場に負て家庫を叩き潰したる  
に其上又た山事に引籠って借金に陥り驍士の突然免の字を食つて權  
妻と泣別れを爲したるに其上また資本を失ふて日雇箱入り華公が口車  
に乗られて公債を賣盡したるに其上また邸宅を拂つて身代限りを爲し新  
聞記者が筆を滑して訟庭に呼出され又禁錮を喰つて罰金を納め蕩樂息子  
が一夜中振れて悄悄自家に歸れば又親父に大目玉を食ふが如く總て災ひ  
に災ひを重ね難に難を加ふ等の即ち是れ泣ッ面に蜂で御座いませう(ヒヤ  
ヒヤ)今道人が此大きい眼の栗玉を張て過く三千世界を通觀するに人々の

利己主義を以て世を渡るの濁水を踏が如く鈍き者の鋭き者に鬚の毛を抜  
れ馬鹿の利功者者に鼻毛を敷まるゝ事恰も助倍治郎の兼兒照婦又於るが  
如き有様で泣ッ面を蜂に螫れる者が多くつて實に畏い世の中で御座いま  
す故に諸君の常に之を戒めて泣ッ面を蜂に螫れぬ様も御用心さつしやい  
ませう(大喝采)

○第四十席

鬚の種類

鬚の種類があると言ふと何だか可笑い様ですが凡そ何物に限らず一物あ  
れば必らず亦た其形に大小長短あり又其色にも濃厚淡薄の別が御座いま  
す鬚も矢張り通りで只鬚と云へば一品で御座いますけれども其小譯を  
すれば鬚の種類も随分澤山に御座います謹聴(今試みに其名目を擧て  
見ますれば即ち鯨鬚、鱈鬚、鯨商人鬚、百姓鬚、學者鬚、山師鬚、隱居鬚、等  
御座います而して其名にも八字鬚、十ボレオン、鬚關羽、鬚清正、鬚生、氣鬚、貴

芝鬘風ッ引鬘等が御座いますすがナント諸君鬘の種類も多いで御座いますせんか(ヒヤ〜)然れども是等の鬘の諸君も已ま目に見耳に聞いて御承知の事されば敢てお珍しく御座いますまいから道人の是より諸君が未だお心附の無い鬘とい何様お鬘かと云ふに容体鬘即ち是で御座います而して容体の鬘たる或ひの鼻の下にあり或ひの腮の頭にあり又其色にも濃も薄きもありて必らずしも一定して居る譯で御座いませんが是の容体に構へ込む人が生して居るから容体鬘と名けるので御座います例へば茲に人あり其口の唇や黄色を帯び其唇の未だ卵の殻が取れぬ其腹の布袋和尚の袋大黒天の俵と一般外面は福々然として十分に寶を入れて居るやうでも其中の貧乏人の米櫃同様一粒の米も無い癖に其氣位の高い事と云つたら仕官を快しとせず商業を屑よしとせず大學士然たる大法螺を吹て飯を喰んと欲し其志しん全く九皇の鶴を欺くも其力の固より藪の中の雀にも及ば

ざるを以て急に勿体心を生じて鬘を生し此鬘を以て人を威すが如き者これを容体鬘の本来本元と致しまと(ヒヤ〜)併しかつら凡そ物に夫相應の相場と云ふが有るもので天下廣しと雖も世界大ありと雖も正味一圓しか無い代物を十圓に買ふ様を醉狂人の御座いません然るも此容体鬘の心る人の先づ此鬘を以て人を驚かし先方を旨と見抜と聞囁りの理屈を並べ或ひの新聞の社説を横取し鬘を撫て容体に構へ何か斯か相手を瞞着て飯の種を接へる者が世間に往々御座います故に諸君の此容体鬘を御存じあらば宜が若し未だ御存じなくば能く鬘の種類に注意して容体鬘を買被らさいやうに成さるが宜しい(大喝采)

○第四十一席 炒豆を食て感あり

炒豆とい俗に云ふハシケ豆書生さんの所謂金米糖で其製は唯豌豆を炒たもので御座いますが見童の固より之を好み大人も亦之を嗜みます故



に街頭に於て豆やマーメ炒立ウマイと賣歩行と幼とあく壯とあく男とあ  
く女と無く爺となく婆と無くオットとつこい爺や婆の齒が無いから  
何だか請合れませんが兎も角も皆集まつて之を買ます(ヒヤ)爾して其  
幼若男女が此の如く先を争ふて炒豆を買の果して如何なる風味がらつ  
て之を賞美するので御座います左程に旨い者なら何故これを會席料理  
や西洋料理に遣はさいので御座いますかト云ふの少し野暮か知りま  
せんが實の道人の元來上の人間で御座いますから恥かしがら未だ  
生れて以來炒豆と云ふものと噛つた事が御座いません又噛つた事が無い  
から其味の旨いやら無味やら辛やら苦いやら或ひに酸味やら甘強いやら  
些も存じません(ソウ)ソコで道人が思ふに人が炒豆くと賞美して食  
のに道人獨りが其味を知らんと云つても此通人の顔に懸るイヤ先祖の位  
牌に對しても濟さい譯だと非常奇奮發心から大枚壹錢を散財して炒豆を  
買ひました然して其買つて來た炒豆を五六粒口に入れて噛つて見るのに別

又賞斷すべき味が無いからハテナ此無味物をナゼ人が旨いと云つて  
賞斷するだらうと思ひながら段々噛締ると成んど云ふに云はれぬ旨い味  
が出て來ました(ヒヤ)是に於て道人の又妙な感情を喚起してナールヤ  
ど是だのら人が賞斷するのぶ全体今の人間の一寸初めて交際した時に誠  
に未頼母しい人間の様でも段々深く交際ふに隨つて其旨い味が抜けて仕  
舞ふが斯云ふ人に此炒豆を食して遣り度ものだと思ひました(大喝采)

○第四十二席

苦樂の説

諸君彼の月を見給へ月に圓滿の時があるかと思へば又虧る時が御座いま  
す又彼の花を見給へ花に満開の時があるかと思へば又散る時が御座いま  
す然れども一盈一虧一開一落天地の常數自然の道理で御座いますから  
亦以て人生に浮沈あるのを知るべきで御座います何をか人生の浮沈と爲  
すかと云ふに道人が演題に掲げたる處の苦樂即ち是で御座ます(謹聽)

扱此一苦一樂一浮一沉と云ふものゝ人生に於てトウしても免かれざる所  
 で御座います諸君試みに思ひ給へ昨日美髯を蓄へ錦衣を襲ひ權柄然たり  
 し人も一たび死の字を食へば其美髯の忽ち貧乏髯とあり其錦衣の忽ち襤  
 褸衣服と爲つて今日の盆棺として裏店に潜り込み或ひの昨日までの權妻  
 を置き外婦を圍ひ大盡然たりし紳士も一たび山策を誤れば權妻の忽ち放  
 逐物と爲り外婦の忽ちお拂ひ箱と爲り當惑平として今日の親類の厄介と  
 あるが如く其榮枯得失手を反すやうに地位を變ずるの猶を翠丸又伸縮あ  
 るが如くで御座います(ヒヤ〜)其伸びる時に當つて願ふ所望む所皆お  
 思ひの儘あらぬ事御座いませんから樂みも亦十分御座います又其  
 縮む時に當つての万事万端に齟齬を生じて思ふ様に成ませんから苦みの  
 益〜苦みと成まを左れば樂と苦と處世上は往來して人をして一喜一憂  
 あらしむるの猶月の盈虧花の開落に於るが如きで御座います(ヒヤ〜)諺  
 に曰く人の七轉び八起と之に由つて是を觀れば苦樂の循環するの轉べの

起き起れば轉び何の事アかい棚の達磨さんが神酒に酔拂つたやう者  
 見えすから人たる者の此苦樂の替り番固に來る處を考へあつての成り  
 ません(ヒヤ〜)夫れ然り然るに世人の兎角お苦樂のグル〜廻つて來る  
 處に注意せずして唯樂をする事ばかりを好み直目前に苦しみを招くにも  
 頓着なく頓鼻樞を質に置て素平多女郎に現を掛し或ひの身代を掠奪られ  
 てボカンと爲るの苦みにも氣が附ずして屁ッ鉢者に夢中とある人の如  
 き樂を知つて苦のあるを知らぬ無鐵砲取も直さぬお先眞暗の盲目で  
 御座います(ヒヤ〜)併しおがら唯苦んで計りも居られませんから樂も仕  
 かければ成りませんが樂が先か苦が先かと云へば先づ苦しんだ跡で樂を  
 するのが順序で御座いますから樂を仕やうと思へば其前に苦しみと云ふ  
 種を蒔て置なければ樂の花の咲かせん故に取分未だ老先の長いお若い人  
 達に能く勉強して置いて老後に樂をする様にお心掛が肝心で御座います  
 (ヒヤ〜)大喝采)

○第四十三席

オツカアの説

オツカアとい何で御座いませう即ち是れ赤ン坊の云ふおツカアヤン芝居の文句に云ふ母者人東京人の云ふオッソロ京坂人の云ふオカ、はんにして之を分り易く云へば母或ひの母親で御座います近來赤髯さんの新文句を舶來して曰く勉強の幸福を生む母ありと蓋し凡夫凡婦と雖も子を生むを母の仕事とすれば其意知り易く悟り易きを以て斯云ふので御座いませう果して然らば凡そ物を生み事を生む者の皆名けて母と云ふも敢て不都合の御座いますまい若し夫れ物を生み事を生む者をオツカアとそれバオツカアの澤山御座います今試みに其荒増を云つて見ますればエヘン先づ放屁のオツカアの薩摩芋あり欠伸のオツカアの退屈あり嚏のオツカアの風邪あり鼻下長のオツカアの助倍心あり愉快のオツカアのお金あり娼妓のオツカアのお尻あり藝者のオツカアの三味線なり權的のオツカアの馬

骨あり民権家のオツカアの愛國心あり夫婦喧嘩のオツカアの貧乏あり謀反のオツカアの不平等あり商人のオツカアの花主あり百姓のオツカアの鋤鉋あり車夫のオツカアの車あり馬丁のオツカアの馬あり落話家のオツカアの世間の短所なり講釋師のオツカアの昔の戦争あり俳優のオツカアの舞臺あり相撲のオツカアの土俵あり五穀のオツカアの花あり人間のオツカアの五穀あり火事のオツカアの火あり雷のオツカアの越歴あり醫者のオツカアの病人なり坊主のオツカアの亡者ありオット此様に味噌も糞も誤多交にしてオツカアくと云つた日に三百六十五日ノベツにオツカアくと云つても逆もオツカアの種の盡ませんから先づ此邊でお仕舞に致しませう併し是でお仕舞にして何の功能も御座いませんから最一ッオツカアを云ひますが道人のオツカアの聴衆(否)看客諸君で御座いますからオツカアちゃん何分お引立を願ひます(大喝采)

○第四十四席

道理が絲瓜り絲瓜が道理り

九六

諸君よ道理どの何様かもので御座いますせう團子として團子のやうな者で御座いますか豆腐のやうな者で御座いますか乃至又た漠然として河虎の尻の様な者で御座いますか道人の團子を嚼れば甘いか塩辛かの味あるを知り又豆腐を食へば淡泊にして泡のやうな味のあるを知り又河虎の尻を嗅ぐにカウとい申し兼ますけれども兎に角尻と云へば定めし臭くって鼻を摘むやうで御座いますせうが唯道理と云ふ者の聲も亦く臭味も無く形も亦く目にも見ぬ者で御座いますから剛い者やら柔かき者やら辨別する事が出来ません(ヒヤ／＼)併し亦から道理と云ふもの元來仁者と智者とが共和して製造した者で御座いますから聞て之を味へば云ふに云はれぬ味の有るもので御座います然れば道理と云ふものの一ツの人造物にして時あつて之を廢し時あつて之を枉るも敢て差支への

無小者で御座いますせうが強て道理を粘着れば何にでも道理の附くもので御座います(ヒヤ／＼)例へば立派な男兒にして肩を脅かし化粧笑ひを爲し紳々瀧々人の鼻息を窺ひ人の髻塵を拂ふの通常の道理から之を視れば廉恥を知らぬ奴だと罵り墨丸の無い治郎だと笑へど全体人間の此世に居る中の衣食住が第一だから縦に破廉恥にもせよ之に因て飯を食へば是も一ツの商法だと云へば成程是も道理の様に聞えます(ソウ／＼)又女子にして巧笑妙媚忽ち狼狽忽ち嘔み姉の徳義を廢し婦の淫行を糺まゝとるの通常の道理に違ふとい云へ元來女の此世もある男に相合ふが爲されば其相合ふための者が相合ふに於て何の不思議があるものかと云へば成程これら道理の無い事の御座います(ヒヤ／＼)扱この理から推して見ると麻兒と變じて頻に柳巷に轉び黠姉と化して常に花街に狂ふもの却つて婦人柔順の美德に適ふかも知れませんが又斯云つて見ると道理が絲瓜りから絲瓜が道理りやちやうど六ツ六ツが分りませぬ(ヒヤ／＼)扱また此道理と絲

九七

瓜どの別がサツパリ分らさいとした日に爲て見ると娘に情夫を控へるの  
道理あれバ少年に女郎を買ふの道理もあり淫婦に娼妓と爲るの道理もあ  
れバ治郎に身代を潰すの道理もあり私窩子が面を眞白に塗て容を引張の  
道理あれバ權素に假面を被つて鼻毛を數むの道理もありませう御座る  
と道理と云ふもの恰も絲瓜の棚にブラ下るが如く之を何處へ持つて行  
つて附着けてもブラくとして附着もので御座いますけれども此道理と  
絲瓜とを嗅分けるに先づ十人の中で七八人までが道理と云へば之を道  
理とし十人の中で七八人までが絲瓜と云へば之を絲瓜とする如く何でも  
之を是とする者多ければ其方を取より外に仕方が御座いません然るに十  
人の中で八九人までが道理とする者を其残りの一二人が絲瓜を以て道理  
だと強情を張るやうな事があるから無理が通つて道理が引込ひやうな事  
になるので御座いますイヤ餘り長く成りますから一寸一服遣りまして日  
序に無理が通れば道理引込と云ふ演題を饒舌つて之を補ひませう(大喝采)

○第四十五席

無理が通れば道理引込む

諺に無理が通れば道理引込むと云ふ事が御座います成ほど世間には無  
理を通して道理を引込せる者がイヤクも御座います今夫れ亭主の無理あ  
る其無理を通して女房の衣服を七ッ屋に打込で洲崎や芳原に浮れ旦那の  
無理ある其無理を通して番頭の諫を帳場に拒んで新橋や柳橋に遊び我儘  
の阿魔の無理に情々を通して破戸者の情夫を婿に取り氣儘息子に無理に  
強情を張つて馬骨の暈婦を嫁に貰ひ山師の無理に衣服を算段して外貌を  
胡麻化子貧乏人の無理に片羅を工面して一時を屁茶麻化すも其無理の  
随分無理で御座います(ヒヤ)扱この無理が通つて道理が引込と云へば  
甚だ怪しむべき様で御座いますけれども又能く考へて見ると怪しむ處  
の御座いません例へば道理の猶堤の如く無理の猶水の如しと云つたやう  
なもので堤が平生に水を防いで居ても水が一度漲れば其堤も打破れる事

も御座いますから道理も此通りで道理が平生は無理を抑へて居ても無理  
が一たび激すれば其道理も消滅する事が御座いますけれども是の腕突を  
以て車を横に曳き船頭が多くて船を山に上せた様かもので逆も長くの積  
ません無理の通るもホンノ一時道理の引込むのもホンノ一時の事で御座  
いますから同じ一時の事あらば彼の腕突を以て車を横に曳き或ひは船を  
山に上せさい様に仕度もので御座います(大喝采)

○第四十六席  
餅の利害

諸君この世の中に餅と名の附ものゝ澤山御座います而して其種類が澤山  
あれバ亦た其種類に由て利害得失も違はなければならぬ道理で御座いま  
す今その餅の種類および利害得失の荒増を云つて見ますれば牡丹餅、餡衣  
餅、大福餅、栗餅、櫻餅、汁粉餅、牛皮餅、海苔餅、砂糖餅、豆餅、柏餅、水餅、揚餅、切餅、かき  
餅、阿部川餅、鏡餅、堅餅、自在餅、雑煮餅、あどの下戸の治郎を始め奥様御新造お

内儀さん子供守お三乳母に至るまで皆好んで之を食ひますけれども時  
に依ると食障する者があるばかりで敢て害に成りませんから皆さん食  
障をせぬ様にお澤山召あがれ(ヒヤ)夫から疝氣餅、瘧氣餅、痰餅、惡癖餅、あ  
どの害があつて益のさい者で御座いますから餘り好んで召あがらぬが宜  
し(ヒヤ)夫から尻餅、焼餅、提燈餅、あどの害にある様か害にあらぬ様か  
益にある様か益にあらぬ様か異体の分らぬ餅で御座いますから若し  
召あがる様か害と利とを嗅分けて然る後に召あがれ(ヒヤ)夫から  
諸君に是非召あがれとお勤め申し上ますのゝ子餅、金餅、家餅、地面餅、御  
坐います此餅の餘程利益のある餅ですから縦ひ賣の餅腐りと云はれても  
何でも其様か事に順着せずして食障するほど召上るが宜ろし(ヒヤ)夫  
から一ツ申しませう扱右の餅の外に椽の下の方餅と云ふ餅が御座います是  
の召上つても格別害に成せせんがト云つて又餘り益もありませんから

益のよい力餅から先づ好んで召あがるも及ばず又其外に借金餅と云ふ餅が御座います之を召あがると恰是取餅捕へ足を突込だ様も二進も三進もあらぬ仕舞いに首も廻らなく成やう毒餅で御座いますから決して此餅を食はぬ様に御用心なさるが宜かんべ(大喝采)

◎第四十七席

人の金銭の奴隷

諸君よ娼婆の奴隷の巢窟で御座います世界に奴隷の掃溜で御座います故に奴隷を以て奴隷に嫁し奴隷に嫁して奴隷に交り奴隷が奴隷を生んで奴隷が益々繁殖するので御座います(ヒヤノ)今その奴隷の荒増を云つて見ますれば俵祿の奴隷鯨鰯の奴隷名利の奴隷民権の奴隷會議の奴隷書籍の奴隷天狗の奴隷商賈の奴隷筆墨の奴隷植物の奴隷工業の奴隷亡者の奴隷簿録の奴隷報方の奴隷旦那の奴隷三味線の奴隷天秤棒の奴隷其他何の奴隷彼の奴隷と奴隷の固より澤山で御座いますから一々これを並べ立る事

へ出来ませんけれども其澤山の奴隷を一縛りにして見ると只金銭の奴隷と爲て仕舞ます(謹聴)諸君試みに思ひ給へ人奴隷に安んじて朝早く起き夜に晩く眠り蠟燭汗水を垂して稼ぐの何の爲で御座いませう只金銭が欲しいからの事で御座いませう今若しイクラ汗水を垂して稼いでも金銭が手に入らない日に誰か酔狂に働させう恐らく一人半欠も働く者の御座いますまい果して然らば人間の働くの只金銭が欲さふ稼ぐので御座いますから之を金銭の奴隷と云ふも敢て見當違ひで御座いますまい(せせく)殊に今人の狡猾の擲兒の如く慾張心の材狼の如く轉んでも只の起す遣し物があれば石でも掘み石が無ければ馬糞でも掘み義理を視ると絲瓜の如く人情の無きと木偶の如く片羅の羽々たるを見れば其惠比壽様と共に子々くと笑つて忽ち之を掘まんとし銅貨のチリン／＼を聞か其龍の機嫌と均しくハイ／＼と屈して忽ち之を貰はんと欲し借る時の地獄と霞の返す時の間度と爲り實に現金懸直あく正札附の慾張で御座います

て其根性の汚穢い事と云つたら口にも云へず筆よも書き續はも書き位  
で御坐いまするら人の金銭の奴隷と云ふので御坐います併し奴隷と云は  
れて若し瘡に障るお人がありますから眞平御免下さい(大喝采)

○第四十八席

蒔ぬ種なまの生ぬ

諸君よ諸君の毎日三度ツ、飯を食るゝで御坐いませうが其三度ツ、食ふ  
飯の種即ち米と云ふものの自然に湧て出る者で御坐いませうか米屋へ註  
文すれば直に持て来まするけれども其元を正せば百性が田へ米の種を蒔  
て作るから出来るので御坐いませう又諸君の年箇年中衣服を着て居らるゝ  
で御坐いませうが其年箇年中着る衣服の種即ち絹木綿の類の自然にピヨ  
コリと出来るもので御坐いませうか呉服屋へ注文すれば直に擔ひて来ま  
すけれども其元を正せば其綿や蠶の種を蒔から出来るので御坐いませう(ヒ  
ヤク)人間も是と同じ事で人の風上に立たう人より上座又坐らうと思へ

バ初めより夫だけの種類を蒔て掛らなければ成りません例へば茲に大工の棟  
梁あり此棟梁の毎日只握り罫丸をしてブラクと普請場を見廻り大勢の  
子分を願て使つて居る處を岡目から見ると大層樂を顔に見はらし又當人  
に於てもセッセと稼ぐより樂に違ひないが是迎も急に電信や手袋で棟梁  
に爲つた譯で御坐いません必らず子供の時から親方の弟子と爲り着の  
上降しにまでお目玉を頂戴しポンコツを食ひ白雲の頭丹癩の跡を絶す  
赤切の足に生疵の痕を絶す柱の穴堀から荒飽の掛方を覺は夫から辛苦  
の上にも辛苦を重ねて漸く棟梁の株と爲つたので即ち辛苦の種を蒔た結  
果で御坐います(ヒヤク)然るに當節の人間は兎角一足飛に飛上る事ばか  
りを目的として居つて別段種を蒔きないので御坐いませから實の出来やう  
筈が御坐いませんと云つたら種を蒔きくつても隣の畑へ出来たものを横  
取して来るから宜と云はれる人もあるか知りませんが若しも爾云ふお覺  
悟から道人の只へと云ふばかり敢て悪まれ口の種を蒔きません(大喝采)



○第四十九席

親父の戒めを思ひ出した

道人の今こそ此様に見る影もあいな姿に爲て時々乞食と間違へられる様も  
哀れ果敢なき境界に陥つて居りますすが是でも昔しの武士の家へ生れた立  
派な若旦那で御座いますから御維新前の武士並に錆刀を二本差して居り  
ましたが其頃親父の戒めに刀の人を殺す爲に差して居るものでないか  
ら決して人を悩めて成らんツと口厭煩く云ひました道人の之と聞いて  
親父にも似合ひ事を云ふ刀の人を切る爲に差して居るものを人を殺し  
て成らぬとの卑怯千萬人殺せぬ位から刀を差して居つても無益  
だ桶木か天秤棒と差して居ても宜位だと暗に不平を抱いて居りましたが  
今と爲て考へて見ると成程親父の親父丈の事があつて道人よりの餘程利  
功であつたので御座います(ヒヤ)ナセ又今更と爲つて感心したかと  
云ふに全体刀の用ゆる人に因つて兇器ともあり護身の具にもある者で御

座いますから之を用ゆる者が注意しおければ折角身を護る爲に差して居  
るものが却つて身を害するの道具と爲ります手もあく今の法律と同じ事  
で法律の素より人の身を護る爲に出来て居るものおれど若も之を用ゆる  
人が彼も法律是も法律と無暗に法律を振回した日に法律がある爲に人  
の苦しむ事の丁度刀を濫用して無茶苦茶に人を悩すと同じ事で御座いま  
すから夫是を考へると親父の戒めの成程道理であつたと今更感心致しま  
す(大喝采)

○第五十席

看板の偽りあり

諸君彼の商賈を見給へ頭を下る事平蜘蛛の如く世辞を云ふと豆蔵の如く客  
の心を探つて其好む所に投じ不意氣の編を云ひ回して粹の粹なる者と爲  
し一度店に來りし者の何か斯か生捕て死さぬ者い者は是れ老練の呉服屋で  
御座います然れども此呉服屋さんをして演説壇上に立しめたるは臣者

と同様一言一句も發する事の出来ぬ御座いませう(ヒヤ)又彼の空  
談者流を見給へ其壇上に登った時の辨舌滔々立板は氷を流すが如く驚を  
云ひ回して黒しと爲し鴉を云ひ回して白しと爲すも人の成程尤も至極の  
論と爲し牛の糞の味増と同じくお月様の籠と同じと云ひ針程の事も棒程  
の事と爲し蚤の罌丸の地球はどあると云つても人のヒヤ(謹聴)と  
云ひます然れども此先生をして實務に當らしめたからバ戸長役場の小使  
にも及ばぬいで御座いませう(ヒヤ)其の外大工に鋸を持せたからとて  
雪隠の壁も塗れ左官に鑿を持せたからとて穴のハギル事の出来ま  
せん故に壁にも餅屋の餅屋どか或ひの商賈の道に依て敏しきと云ふ事  
もあり又其看板を掲げ肩書があれば必らず其看板あり其肩書あり孰れも  
其職分だけの實が御座いませう然るに廣い世間の中に只体裁ばかりで餅  
屋の看板を掲げながら餅を搗く事を知らず立派な肩書を附て法螺を吹か  
がら肩書だけの事の出来ぬ者がイヤラも御座いませう是の看板に偽り

ありとでも云ふので御座いませうか道人にハッパッ分らない事があり  
ますが諸君是の何ぞせうか試みに考へて御覽あさい(大喝采)

○第五十一席

怒りを還さぬ

怒を還す勿れと云ふと何だか船頭に異見でもする様を演題で御座います  
が決して爾云ふ譯での御座いませう往昔良公と云ふ人が孔子に向つて足  
下の弟子の中で何と云ふ男が一番學問が出来るかと問ふたら孔子の之に  
對へて顔回ある者あり學を好むを還さず過ちを再びせずと云はれまし  
たと云つて道人が之を立聞したので何でも無い爾云ふ事が論語の中に  
書てある處から此演説の種を引張出したので御座います但その怒を還  
すとの先づ早く云ふと八ッ當りと云ふ奴で御座います(謹聴)ソコで此  
八ッ當りと云ふ奴の男の餘り有りませぬが女に兎角あり勝で御座い  
ます例へばお内儀さんに何か失敗があつて御亭主から尻を食ふと夫が悔

しい原因と爲つて其飛ッ尻がお三も刃る夫から小僧に波及して其次が子  
供に劍突其次が火鉢から炭取にまで漸々とカウ及ぼして行つて獨りで威  
張て獨りで眼の緑玉をヒン剣て居る處へ肝心を用的ある人が行つてもア  
リくして碌々に挨拶も仕さい様も人が往々あるもので御座います。是  
が即ち怒を遷すので御座います(ヒヤ)尤も此怒を遷ささい様にすると  
云ふ事孔子の七十何人のお弟子の中でもヨツタ顔回一人であつたと云  
ふ位だから随分六ヶ敷事に違ひさいけれども併しお三とんに失策があ  
ればお三とんに對小言を云つて小僧に失策が無ければ小僧の笑ひあがら  
遇つて遣る小僧に氣に食さい事があれ小僧に劍突の食してもお三に遣  
損ひも無ければお三の其儘に打棄つて置く又た自家に誤多草があつてッ  
ツく云つて居ても其處へ客が來れば客に矢張ニコくして自家のボ  
ロを見せさい位を事の難にでも出來やうと思ひますから貴の入ッ當り好  
の人々のオオお考へ下さい(大場丞)

○第五十一席

鬼の説

此世で悪い事をするに死だ時に地獄へ追遣られて赤鬼や黒鬼に取捕まつ  
て針の山へホイ上げられたり血の池へ放り込れたりして苦しい目に逢あけ  
ればあらいから何でも此世に居る中の悪い事をしての成りませんツと  
坊さんの御親切に説教を成さるけれども道人の未だ地獄へ行た事が無い  
から地獄に赤鬼や黒鬼が居て其様も手荒事をする者やら仕ない者や  
ら又鬼と云ふ者の赤い者やら黒い者やら紫の者やら班の者やら何だかサ  
ッパリ知れませんが生れて虚言を吐く事のさい人を欺した事のさいと云  
ふ道德學の元祖の孔子でさへも其鬼に非せして之を祭るの附ふありと仰  
しやツたから爾して見ると鬼と云ふ奴もある者で御座います。然ればこ  
そ渡邊の綱の鬼の腕を打切て鬼の目に涙を溢さしめ諺にも鬼も十七山茶  
も炭花と云ふ事があるので御座います(ヒヤ)其他人に鬼王の名あり

酒に鬼殺しあり方角に鬼門あり神に鬼子母神あり飢弄物に鬼假面あり瓦  
に鬼瓦あり草に鬼蒨あり食物に鬼べあり(是ハナト)子供の遊びに鬼ゴッコ  
あり小兒の夜泣を止るに鬼の念佛あり夫から又た悪心の婆アを鬼婆アと  
云ひ悪人の夫婦を鬼の女房に鬼神と云ひ怪物の横行するを百鬼夜行と云  
ひ大丈夫あ事を鬼に鉄棒と云ひ蕎麥家の豆を蒔いて鬼の外福の内と云ひ  
話しにお負を附着るを鬼附ると云ひ(是ハナト)淫賣女を白鬼と云ふあど  
鬼の名の附く者も随分澤山に御座います(ヒヤ)併しあがら此様を鬼の  
イタラあつても些とも痛くも痒くも御座いませんが道人が只恐怖と思ふ  
のハ彼の古人の句に元日や昨夜の鬼が禮に來たと云ふ其鬼で御座います  
諸君ナント此鬼を退治する工夫の御座いますまいか真逆に縁切腹を煎じ  
て呑しても功能もあるまいし去とて債鬼の流々仕上を御覽じと駄洒落處  
でいなしハ何したら此鬼が攻めて來さい様に成りませうか諸君の中  
若し名法を御存じの御方があらば教て下さり(大喝采)

○第五十三席

家鴨人間

人間の中にも脊虫人間だの鳩胸人間だの鶴首人間だの狎噫人間だの狸治  
郎だの河虎小僧だのと動物に縁故のある人間の幾許もありませすが家鴨人  
間と云ふのハ抑々道人の發見した人間で御座いますト云つたら氣の早  
い人の早呑込みでナンダ發見しよとの片腹痛い今更道人の講釋を聞か  
くても首の長い脚の短かい人間の世間にイタラもあると仰しやるか知り  
ませんがヤア其様急に急込給ふを道人の發見説の仁義五常の道徳から割  
出した新説で御座いますから其積りで御聞下さい(謹聽)扱家鴨と云  
ふ奴の交合する事も知ッて居り卵を生む事も知ッて居りますすが其卵を化  
して子とする事を知らせ又た子と爲りても之を養育する事を知らず其卵  
を化して子と爲し又其子を養育するのハ皆鶏を頼むので御座います故に  
家鴨の子でありながら家鴨を親と思はず親と思はなければ素より親子の

情合も何にもなく却って異性の鶏を親と思ひ又鶏も我子の様に思つて居  
りますがナント諸君家鴨と云ふ奴の親と爲て親甲斐の赤い鳥での御座い  
ませんか(ヒヤ)併し是の禽獸社會の事で御座いますからマア何でも宜  
やうなもの、若も此の如き親が人間社會にあつたら如何なもの、御座い  
ませうイヤあつたら處でのかい現在此の類が人間社會にイッラも御座い  
ます諸君も御承知の通り自分で子を生みながら自分で之を養育せずして  
月に何程かの手當金を附けて他人に養育を托する事が御座います是の東  
京でハ里ッ子に出すと云つて平氣で居りますけれども能く考へて見ると  
彼の家鴨の親と趣きを同じふする者で御座いますから道人の之を稱して  
家鴨人間と申します(ヒヤ)併し此家鴨人間でも宜から其子の養育が立  
派に行届いて鶯の子が鷹にあつて呉れば宜しいけれども此養育を頼まれ  
た者の素より赤の他人で親子の情合も何にも無く只月々の手當金さへ滞  
はりなく貰つて子供に飯さへ食して置けば宜と云ふ主義ですから其子が

立派な者に成りやう筈が御座いませんソコで又た此子供は何だかと云ふ  
に夫やア何しても傍近くに居て餵菓子を貰ふ方の愛を慕ふて之を我親の  
やうに思ふて居りますから肝心な實の親の傍へ伴つて歸つても親子の情  
合と云ふものが些とも御座いません夫親にして親の情あく子にして子の  
情あければ是を何と申しませう外に名の附やうが無いから道人が之を家  
鴨人間と云ふのの決して出鷹目での御座いますまい(ヒヤ)故に諸君の  
中に此家鴨人間があつて斯云はれて若か腹が立つならば自分の生んだ子  
を人に養育して貰ふやうな家鴨然たる事を成さらぬが宜しい焼野の雛子  
夜の鶴と云つて鳥類でさへ我子の爲に命をも捨ると云ふ位な情のある  
ものあるに況て万物の靈長たる人間が我子を振捨て願みかい杯と以て  
の外の事で御座いますト云つたら夫ぢやア里ッ子處でのかい大道へ棄て  
仕舞ものさへ有るが是は何したものだ、と仰しやる人もあるか知らんが我  
子を棄るやうな奴の我々人間仲間の者と思ひませんから道人のモウ匙

を抛げて仕舞ます(大喝采)

夏夫

○第五十四席

似非論

小便の色に味淋に似て居りますすけれども其色が似て居るからとて小便を以て味淋に代用する事の出来ません又た糞の質に味増に似て居りますけれども其質が似て居るからとて糞を以て味増にする事の出来ません様なもので世の中に似て非ある者の大抵この類で御座います(謹聴)例へば酒薦を被つて橋の上に寐轉び太閤様の賤き時を氣取て自ら英雄ありと謂ふも其勇氣の蜂須賀を壓する處か犬が吠ても震へ込み一劍を腰に横へて山の中に入り漢の高祖の微ありし時を真似て自ら豪傑ありと謂ふも其豪氣の白蛇を斬る處か蚯蚓を見ても膽を潰すが如きの最も馬鹿げた似非者で御座います故に牛董の假面を被り邊理の假聲を遣ふもの之を似非學者と云ひ八字の上等髯を捻くり山形の高帽子を戴くもの之を似非紳士と

稱します(ヒヤ)然れば權的の奥様に似て風姿婀娜たるも自から非ある所あり馬骨娘のお姫様に似たるも其素振に於て何となく非ある所あり偽の民権家の外面が志士に似たりとて精神に至つては非あり鉛の刀の鋭々たるは正宗行爲が君子に似たりとて心術に至つては非あり鉛の刀の鋭々たるは正宗糞を食へど云ひさうに見ても其實の大根を切の用にも立老鍍金のピカピカたるは純金尻を嗅と云ひさう亦有様あれども其實の眞鍮の直打にも及ばぬと此類を一々勘定致ましたから社會上の事々物々皆似て非あるものと云ふも強ち一理の無い事もあるまいと存じまして聊か似非論の一席を辨じました(大喝采)

○第五十五席

馬車の馬

人を除させるの喇叭の聲のブー〜馬の臀を打敲く鞭の音のバチ〜之に車の響のゴロ〜を加へて頭に往來するの即ち是れ日々夜々新橋から

淺草に至るの馬車で御座います道人の此馬車を曳く所の馬を見るに一輛  
の馬車に乘客が六人外に馭者馬丁を合せて都て八人を曳て走りまを其日  
方へ果して一疋の馬の力に相當したるものか相當な者か知りません  
けれども此馬車の六人乗が御規則ぢやさうで御座います其馬の腎邊の  
毛皮剝奪し肉瘦体の弱りたるの恰も骨皮道人の如く氣息急にして呼吸喘  
ぎ最も憐むべき者で御座います(ヒヤ)諸君この馬の腎邊何故に禿  
たので御座いませう又何故に肉の瘦せ体が弱つたので御座いませう元來  
此乗合馬車の馬丁ある者の素より華君髯氏の馭者の様ももので御座い  
ませんから其馬を取扱ふの残酷ある其鞭を下すの苛虐ある終に馬をして  
毛皮剝奪し腎邊に肉を露はすに至らしむるので御座いますナント可  
愛想なものでの御座いせんか(ヒヤ)且つ其疾驅を促すの速かある其  
力の堪ざるにも拘はらば頻に之を打敵くゆゑ自然に肉瘦せ体弱り累々と  
して恰も喪家の狗の如く彼の氣息急に呼吸喘ぐを見れば其勢も亦た想ふ

べきで御座います(ヒヤ)而して此馬車馬の辛苦の彼の馬丁の風体を見  
ても知れて居ります諸君も御存じの通り馬丁の必らず二人ありまして一  
人の前に居て鞭を執りエ、イ、と掛聲を爲す之を取者と云ひ一人の後  
に居て常に新橋く、淺草く、と吐鳴つて乘客を呼ぶ之を引手と云ひます  
が其風体の悪い事と云つたら即ち是れ昔時の雲助苛酷と相似たる者で其  
振舞の無茶苦茶ある事と云つたら半の乱暴を以て業と爲し半の喧嘩を以  
て職と爲し右に左に西に東に流浪漂泊常に處を定めず眞に是れ手にも追  
へず箆にも棒にも掛らない奴で御座います此苛酷治郎の使役を受ける  
馬車の馬こそ誠に御命極まる馬と謂ふべきで御座います(ヒヤ)然るに  
同じ馬車を曳く馬でも彼の華君髯氏の馬車を曳く馬の之に反して常に馬  
丁の保護を受け清々潔々たる厩に居り食ふに麥豆あり寝るに藁薦あり軸  
時出て車を曳ても馭者の漫に鞭を加へずか負に其乗せる所の人の且突と  
權的と二人位馭者馬丁を合せても僅に三人か四人で御座いますから之を

新橋淺草通ひの乗合馬車に比ぶれば其幸と不幸との大變亦大違ひで御座  
います(ヒヤ)諸君同じ馬車の馬でさへ此の如き大違ひがありますから  
人間に幸不幸のあるの素より怪むに足ませんが……イヤモウ止ま  
せう餘り理屈張ますから(大喝采)

○第五十六席

娼妓を買ふ三法あり

斯様お題を擔ぎ出すと何だか猥褻な文句を饒舌るかの様に一寸思はれる  
御方もあるか知りませんが決して御心配下さるる猥褻な法律の許さる  
所道人も亦た之を厭ふ所で御座いますから題目の猥褻に似て居ても其様  
亦助倍心を養成する様亦多話言の申しません其証據は是から饒舌る處を  
聽て娼妓知下さい(謹聽)夫れ技藝を賣る者これを藝妓と云ひ春情を  
賣る者これを娼妓と云ひます故に娼妓と藝妓との差別があるやうで御座い  
ますけれども其妓と云ふ名目の同じ事で御座います然るも世の人の往々

藝妓を先みして娼妓を後にするを通例とするの抑々如何ある譯で御  
座いませう是の其商賣とする所聊か貴賤あるの故で御座いませうか若  
も此商賣に因て上下の別を附けるとの事あらば實に不粹の隊長馬鹿正直  
の親玉と謂はねば成りませんナせあらば古昔の藝妓の如何ありしかイヤ  
知らねと試みに今日の藝妓を御覽じる應來くスッテン轉々で其面附を  
賣り其春情を賣り縦ひ圓助でも半助でも甚だしき十錢頂戴廿錢宜しい  
と云ふ有様で御座いますから其名目の藝妓でも其内幕を覗いて見ると娼  
妓と些とも違つた處の御座いませんイヤ些とも違つた處の無い計りであ  
く娼妓に下る事一二等却つて私窩子に髣髴たる者で御座います尤も殘ら  
ず爾と云ふ譯で御座いません中に看板通り遣つて居る者も御座いま  
すけれども先づ右の應來猫も娼妓の仲間へ一所お混淆んで娼妓を賣ふに  
三法ある譯柄を一饒舌り饒舌りませう(ヒヤ)謹聽)何をか娼妓を買  
ふの三法かと云ふに第一の色を買ひ第二の興を買ひ第三の情を買ふ即ち



是で御座います猶一步を進めて此三法を細に嚙碎け玉に漆を塗て以て  
 眼と爲し雲を山に掛けて以て鬢と爲し皓齒蛾眉ボツテリ肥満て楊貴の如  
 くスラリと瘦て越姫の如く白粉を塗て奇麗あるの高尾を吃驚させ莞爾嗤  
 った愛嬌の薄雲も膽を潰し起バ芍薬坐れバ牡丹巧笑倩たり美目眇たり人  
 をして一瞥魂消し一見魄飛び坐るに漢武の傾國を憶ひ轉た楚襄の雲雨を  
 慕はしめ寐ての夢に入り寤ての目に現はれ恍々惚々忘れんと欲して忘れ  
 ラレくぞ千思万考意馬を驅り心猿を追ひ雨の降夜も風の日も鼻の下を  
 伸して出掛る者これを色を買ふと云ひます(ヒヤ)顔面の三十二相の番  
 外に居り容姿の十人並に見えざるも痴蝶の術狂蜂の戯愈く出て愈く  
 奇に益く密にして益く妙に鴛鴦の交り關雎の接前より後より右より  
 左より秘術を盡し奥の手を極め客をして爽快限りあく殆んど人事を忘却  
 せしむる者これを稱して手取と爲す即ち是れ四十八手外の妙手にして是  
 を興を買ふと云ひます(ヒヤ)悄悄として親の不幸を説き悲しさに身

の不仕合せを話し其心底を叩き其意中を盡し指を折つて年季の長きを嘆  
 き膝に倚て情合の濃かあるを樂み天に在ての比翼の鳥海に在ての平目の  
 魚お前百まで私や九十九までと相依り相助け情の一日より深く思ひの  
 月一月より加はりピツマリとして離すべからずネツトリとして分つべか  
 らざる者これを情を買ふと云ひます(ヒヤ)今夫れ酒に酔ふて花街に轉  
 げこみ興に乗じて解語の花を訪ふの是れ皆一時の女郎買で御座います  
 から共に其遊ぶ趣きを語るに足ませんけれども真正の女郎買の決して  
 此三法の外の御座いません而して此三法の中に就て其色を買はんか其興  
 を買んか將た其情を買はんかと云ふに其色に耽るの素人で御座います其  
 興を買ふ者の通客で御座いますソコで其情に溺れる者の之を何と云ふで  
 御座いませう素人と云ひませうか通客と云ひませうか否か素人でもあし  
 通客でも無し所謂放蕩漢で御座います(ヒヤ)爾して此色に耽るの素人  
 の訓誡すれば随分其心を正ふする事も出来るし興を喜ぶの通客の心に戒

めて其溺れを救ふ事も出来ずが只彼の情に睡むの人のドケしても其娼妓と夫婦と爲つて見かければ其惑ひを開く事が出来ません若も枉て生木を裂ふとすれば必らずや浦里おちやアと手に手を執て道行振と出掛るか然も無ければ南無阿彌陀佛の一聲を置土産にして地獄へ旅立するの古往今來これを淨瑠璃に徹し之を芝居に見ても知れて居ります(ヒヤ)諸君娼妓を買ふの法の荒増此の通りで御座います道人が今口を酸して片言交りに此法をお饒舌りするのも一以て遊治郎と戒め一以て放蕩漢に告るの老婆心で御座いますから諸君若し御合點が参りましたあらば宜しく御注意をささいまし(大喝采)

○第五十七席

知れ切れた話

諸君火の熱いもの氷の冷いものとの知れ切れた話して御座います又た石の堅いもの豆腐の柔かきものと云ふ事も知れ切れた話して御座います又た砂

糖の甘いもの唐辛子の辛い者と云ふ事も知れ切れた話して御座います(ヒヤヒヤ何がヒヤ)だかサツパリ分らん)又た冬の寒いもの夏の熱いもの冬の寒いからと云つて火の中へ潜り込めば焼死で仕舞ひ夏の暑いからと云つて大道を真裸体で歩行ば巡査さんに叱られると云ふも知れ切れた話して御座います(ヒヤ)其外罌丸の男に在て女に無いもの頭の上にある者足の下にあるもの目と耳との二ツあれども口と鼻の一ツの者酒を飲めば酔拂ひ團子を食ば腹が脹れるもの赤坊の話し相手に成らず盲目の目の見えぬ者足の立す鱈の耳が聞えず鳥の黒い者鷺の白い者尻の臭いもの麝香の香の好もの猫の鼠を捕もの犬のワンワン吠る者あどの皆お知れ切れた話して御座います(ヒヤ)諸君……諸君の是等の知れ切れた事御存じあらば死ねば命が無くあると云ふ知れ切れた事も御存じで御座います又た金を遣へば遣ふ丈減つて仕舞ふと云ふ事も御存じで御座います又た稼げば金が出来ると云ふ事も御存じで御座います又た若い時

生涯に一度しか無いと云ふ事も御存じで御坐いませう若い時ハ一生涯に  
一度しか無いと云ふ事を御存じあらば若い時に能く勉強して置かんと年  
を取て後に悔ると云ふ事も御存じで御座いませう(ヒヤ)諸君……諸  
君ハ果して是等の知れ切た話しを知りながらナセ世間ハ命を粗末にし  
て土左衛門と爲つたり痴情に迷ふて情死したりする人があるので御座い  
ませう又金の遣へば減るものと知りながらナセ無駄な資澤をして貧乏に  
なるので御座いませう又稼げば金が出来ると知りながらノサリサ  
と遊んで居らるゝので御座いませう又若い時ハ勉強して置なかれハ年  
を取て悔ると知りながらナセ怠惰な人が多いので御座いませう道人の眼  
から見ると諸君ハ唐辛子の辛い事や砂糖の甘い事の知れ切た話しハ御存  
じでも肝心な知れ切た話しハ御存じない様ハ思はれますイヤ此様な事ハ  
云はあいでも知れ切た話しハ知らん(大喝采)

○第五十八席

論語讀の論語知らず  
論語讀の論語知らずとい即ちいるは短歌の第二に位する格言で御座いま  
して洋學流行の今日から之を見れば少しく古臭い香を帯るやうで御座いま  
ますけれども道人ハ決して其古臭くさい事を信じます蓋し論語と云ふも  
のハ道徳學の本来本元支那の孔子の遺書にして仁義禮智忠信孝悌道徳主  
義の教で御座います(ヒヤ)古來この學を修むる者ハ口の頭ハ常に八  
行の徳を説き動もすれば聖人が何だとか賢人が斯だとか云つて顔回曾子  
を丸呑みにし子思孟子を唇に敷き君子然物知平として大面ハ構へて居ても  
其行ふ所と爲す所の口の頭で言ふのや腹の中に學ぶ處とハ大變ハ大違ハ  
で賢を賢として色に易る處か色を色として賢に易る先生達ばかりですか  
ら王安石を慕ふとか何とか云つて藝妓を花見に引張廻る者もあれハ陶淵  
明に倣ふとか何とか文句を附けて菊の庭に酔拂ふ者もあるやらイヤハヤ  
始末におへない有様で御座いました(ヒヤ)其頃道人ハ或先生に向つて

先生の町の真中に住みながらナゼ自ら隠者と仰しやるので御座います隠と  
 の世を通るゝと云ふ事ですから世を遁れる者から田舎か山の中へでも這  
 入て居て然るべきで御座いますと云つたら先生の獅ッ鼻をヒコ附して  
 イヤ隠者も色々あるぢやテ先づ自己の様に町住居をする者を大隠と云  
 ひ山中にある者これを小隠と云ひ真の處に居る者を雪隠と云ふ(オット是  
 のか負あり)君子の唯塵粉の爲に其身を汚さぬのぢやと其遁辞の旨い事  
 と云つたら實に恐縮すべきもので即ち其頃の學者の風習の牛を描いて成  
 らず却つて厥に類するが如き處から論語讀の論語知らずと云ふ臆が初つ  
 たので御座います(ヒヤ)併しおがら論語流行時代の學者のイッラ君子  
 の假面を被り氣位を高ふして居ても唯自分一人で物知振つて居たので今  
 日の様も悪弊の無かつたから猶恕すべきで御座いました然るに眼玉を轉  
 一轉して目下の學者仲間を見るに陽に大法螺を吹いて愚民を驚かし陰に  
 詭譎を唱へて貴顯に詭ひ巧に人情の向背を觀妙に時好の變遷を探り或ひ

の舍密家とあり或ひの窮理家と爲り漸進主義を主張する時われバ急進説  
 を賛成する時もあり法學兵學文章學天文學經濟學農學何でも御座れと  
 人に因て之を説き時に隨つて之を論じ徳徳突あら呑湖然として志操を變  
 じ金の爲あつた酒亞突乎として氣節を換へ絶て廉恥を顧みる者のあいの  
 是れ風俗輕薄の致す處あるか將た西洋流儀の然る所あるか其邊の何だか  
 知りませんけれども道人の誠に感服仕つらぬ事と存じます(ヒヤ)と  
 云へバ諸君の中より斯仰しやるお方もありませう成程お前の云ふ通りお  
 らバ今の學者の狡猾だ狡猾だけれども其諸學を善するの實に感心ぢや  
 あいかと道人の是にお答へ申さん夫れ然り豈に其れ然らんや人に因り時  
 に隨ひ其諸學を講ずるの最も博學の様でいありますけれども其内幕  
 に立入て之を窺へバ只都合よく旨く胡麻化子と云ふまでの事で御座いま  
 す語に曰く之を愛すればお多福も小野の小町の如く馬糞も牡丹餅の如し  
 と然れば此方で其大法螺に吹飛され彼を以て真正の學者とするから彼の

云ふ處ハ皆學者の云ひ草と聞えるので取も直さず恐いと思へば幕も鬼に見ぬると同じ理屈で御座います(ヒヤ〜)故に今の學者ハ此に目を附けて居るから最初の唯人望を得るを以て務めと致します嗚呼昔しの學者と今の學者とを權衡を以て量つて見たからバ論語讀の論語知らずの目方の何方が軽くして何方が重いで御座いませう道人曰く學者必らず問拔とい昔時の事今云はん學者必らず狡猾ありと(大喝采)

○第五十九席

鶏口となるとも牛後となる勿れ

世の中ハ用ひやうにて簞笠や草履にもある竹の子の皮ト云ひ出すと何だか坊主のイヤ坊主との失敬坊さんのお説教見たやうで御座いますが何に致せ世の中の物事皆この歌の通り同じ竹の子の皮でも人の用ひやうで頭へ冠る笠とも爲り足で踏附られる草履とも爲ります(ヒヤ〜)殊に人間の種類あどの竹の子の皮處でハさい凡そ幾通り幾種類あるか知れませんか

ら其中に草履とあるべき者が笠となつて居る者もあらうし笠とあるべき者が草履と爲て居る者もありませうが是ハ人間の幸不幸運不運と云ふもので仕方がない造物者が如何にサアベルを振回して号令を掛ても号令が行届かさいのだから何する事も出来せんけれども全体人間の種類を分て人を使ふ人が多いか人に使はれる人が多いかと云ふに素より使ふ人より使はれる人の方が多いのだから同じ使はれるから草履よりハ笠に爲つて使はれ度もので御座います然から古人も鶏口とあるとも牛後とある勿れと云ひました(ヒヤ〜大喝采)

○第六十席

子供の行儀悪さハ親の教よよる

教育にも智育徳育体育あど、色々の教育法があつて之を一々講釋すると中々六ヶ敷もので道人如きの半端人間が饒舌るべき事でも無し又た饒舌度も饒舌る事を知りませんからマア其様も六ヶ敷事の物知先生にお頼み

申して置いて道人の唯ホソノ子供に能く行儀を教へおければ行んと云ふ丈の事を一寸手短にお話し致しませう(謹聴)人の家の短所を引合に出して吹聴する譯で御座いませんが道人の懇意な家に子供が三四人ヨクして居る家が御座います但其家の子供と云つたら實に乱暴極まる子供ばかりで客が来て居やうが談話をして居やうが其様な事にも願着なくドシク相撲を取やらフンズリ返って泣やらドンク太鼓を敲くやら瓢床面を被って踊るやらイヤモウ大變な大騒ぎで丸で馬鹿の温習會か大道の飴賣が熱にでも浮された様で御座います(ヒヤ)併し子供の事ですから毎日青い顔をして薬ばりガブク呑で居るより相撲を取るあり芝居の真似をやるあり太鼓と叩くあり笛を吹くあり何でも活潑な遊びをする方が宜しいから道人の其業れ回るのを兎や角云ふので御座いませんが道人が其家へ行く度お面を盛るのの第一客が来ても其家の子供の一人としてお辞儀をやる者が無いのと第二の客の前へ茶菓子を出す

か或ひの鮓を出すとか乃至また酒肴でも出ると何時の間にか其香を嗅付てドカドカと餓鬼道から日附に來たやうに客の座敷へ這入て來て夫から食物の傍へ古雛の五人囃見たやうにメラリと指を咬へて座り込の實に見つとも無い者で御座います(ヒヤ)併しこれを教育家に云はせたら對しても甚だ失敬で御座います(ヒヤ)放任主義と云ふか發育を妨げないと云ふか知りませんが先づ世間並の教育法から云ふと子供の素より親の教やうで何でも成るもので御座いますから右の如く人が來てもお辭儀もせず又た客に出した食物を食ひたさうに指を咬へて見て居るのも皆親の教の不行届きから生ずる餓鬼了簡で御座います尤も此類の世間にイッラもあつて中に客の前で子供を叱り附る人もあります但其處が子供ですから客が來た時に急に行儀を教た處が中々さう早く速成卒業といふ行ぬもので御座います(大喝采)

○第六十一席

時候晩れの説

三月の彼岸に蒔べき種を四五月頃に蒔ば時候晩れですから其種が生たに致せ何せ碌きもの出来ません世の中の事の皆この通りで例へば娘も年頃にあれば早く他家へ縁附るとか自家へ婿を取とか時候に晩れぬ様に云ふいと彼の箱入の饅頭何時か出がつきと云ふ様お心配が出来し年頃の息子に相應お嫁を迎へて時候に晩れぬ様に云ふいと彼の青樓おふける息子を餅につきと云ふ様お飛でもあい事が持上ります(ヒヤ)其外病氣も時候晩れにあれば風邪も發汗散でも間に合す商賣も時候晩れぬおそれ儲かるべき金も儲からず花見も時候晩れになれば葉ばかりに成つて仕舞勉強盛りの人も時候晩れに成れば其中又腰が弓とあるかと時候晩れからマゴ附事を並べた日に中々十や二十での濟ませんが其時候晩れの中でも一番困るのの國の時候晩れで御座います(ヒヤ)諸君彼の豚尾坊主の國

を御覽とる丸で彼岸に蒔べき種を六月頃蒔て居るやうお者ですから春の彼岸に晩し秋の彼岸に早しで實に埒口アあいでの御座いませんか是に反して日本人の何事も時候に晩れるのが大嫌ひでドーンと大砲が鳴れば午飯を掻込むヂャンと半鐘が鳴れば直に唧筒を曳き出すやうお調子ですから瞬する間に文明の花が咲きましたが併し油断の大敵で御座いますから猶この上あがらも時候に晩れぬ様に云ふ(大喝采)

○第六十二席

日本の職人の何故に活智あきか

職人と云ふの廣い言葉で先づ此文字からの理詰で行くと月給取も職人から百姓も職人商人も職人から大工左官も職人で凡そ何業に拘はらず其職分で飯を食つて居る者の皆職人で御座いますが道人が此處に職人と云ふの右の月給取や百姓を云ふので御座いません矢張世間で職人くと云ふ職人即ち腕に覺えの技術を以て飯を食て世を渡る者を指して云ふの

で御座いますト云ふと股引腹掛の兄い達の捻鉢巻をしてナニ米乱迷自  
 己に活智が無いとヘン憚り様おから活智があるか無いか能く面を洗って  
 見て貰ひ度せ此馬鹿治郎頭を張コルぞと云はれるかも知れませんがマ  
 ヲ待給へ道人の活智と云ふの其様お乱暴お事での御座いません成程職  
 人の中でも東京の職人の随分鼻ツ端の強い方で一寸見た處での活智があ  
 りさうに見ゆるが活智の用ひ處が丸で違つて居ります(謹聽)ナセ活智  
 の用ひ處が違つて居ると云ふに今の職人の活智と云ふの腕力が土盛で  
 其次の馬肉を一人で三斤食たの或ひの酢の立食で五つサハを數だ杯と云  
 ふのを活智があるとして肝心お自分の職業に活智がある無しの上の空で  
 御座います然から職人と云へば其腕前の巧拙に拘はらず下等社會の者と  
 人も思つて居れば自分も爾思つて下等社會に安んじて居るから自分は何  
 様お立派お技插があつても此技插を以て一器一具を發明せやうと云ふ考  
 へも何にも無く只人が何かを發明すれば已れも僅の賃錢を貰つて其道具

に追使はれて居るやうお始末で御座います是でも活智があるト云はれ  
 ませうか(ヒヤ)道人が會て聞た話しに西洋諸國の職人の日本の職人と  
 の大違ひで職人の職人だけの見式があつて例へば洋服屋へ服を注文する  
 に中等の服を着べき人が下等の服を注文しても決してへい畏まりました  
 と云はる又下等の服を着べき人が中等の服を注文しても決して承知  
 せず必らず其人相當の服地や綿柄を職人の方で極めて客に承知させると云  
 ふ位の見式を持って居るさうで御座います併し西洋だからと云つて残らる  
 爾とも云へますまいけれども職人でも随分新發明をして一時に巨利を占  
 め或ひの後世に名を轟かす者のある處と見れば強ち法螺でも有りますま  
 い故に日本の職人も最少し位地を高め真正の活智を出して赤髯の鼻ツ柱  
 と折ペンヨツて遣り度ものです(ナント職人諸君片肌脱で道人の説を賛  
 成して如何で御座います(賛成)大喝采)

○第六十三席



丁寧よも程あり畧するよも程あり

丁寧と云ッたらッイこの維新前までの何でも馬鹿丁寧赤のが當り前のや  
 う赤習慣で御座いました然から一寸手紙の贈答するのでも先づ一筆啓上  
 恐惶謹言の御丁寧赤文句を長たらしく重言交りに書て夫から之を小笠原  
 流に封じて糊をペタ／＼附て其封じ目へペを書て之を又状箱へ入れて蓋  
 をして其上を紐で縛ッて其紐の縛り目を又た小捻で縛ッて其縛り目へ封  
 印してヤット手紙を差出すやうに成るのでそこから中々日の短い時あど  
 一日に幾通の手紙も出せません如何に念に念を入と云ふ諺があつても  
 一通の手紙を出入するの七ッ八ッの戸締りを明あければ成らんと云ふの  
 も餘り御丁寧過るぢやア御座いませんか(ヒヤ／＼)今又これとハアペコ  
 へに略するのが流行で昔し上下を着た處を袴に略する袴の處と羽織に略  
 する手紙も大抵ハ葉書で用を足しお辞儀も手を舉たばかりで事を濟し酒  
 を飲にも盃でナヒリ／＼飲せにコツアでゴヒ飲をする肴も皿へ取分ずに

箸でツ、キ合て食ふなど其外何でも蚊でも十の物の七ッに畧し五ッの事  
 の二ッに略するのが流行で御座います成程七面倒臭い事ハドシ／＼略  
 して仕舞方が世話が無クツて宜とい云へ媒妁人を略して相對づくで夫婦  
 に爲たり月賦で返すべき金を略して一時に身代限りを放り出したたり年詞  
 廻りの名刺を友人に頼んで中庭へ放り込で貰ッたりする手数の略し方の  
 同し略するのでも餘り感心なさい畧し方で御座います(大喝采)

○第六十四席

應來寐兒よ一本參る

諸君よ藝妓の技を賣のが元其本分で御座います恰も娼妓ガ情を賣るのと  
 同じ理屈で御座います而して其技を賣るにハ監視より鑑札を請け税金を  
 府廳に納め公然立派に官許の肩書を得て居るので御座いますから其肩書  
 だけの職業を守り藝妓たるの本分を盡し敢て法に負かず敢て律を犯す所  
 へ無ければ則ち是れ公明正大何處へ出ても立派を天下の一商人で白日

青天の下に大手を振つて自ら藝妓ありと威張廻つても誰も之に向つて少  
 ツ〜云ふものの御座いません(ヒヤ〜)然るに應來妓の待合に船宿に持  
 前の技を賣すして直ちに娼妓の權を侵し私窩子と同様の振舞を爲し香湖  
 の酒亞で人又對しても別段恥かしいとも思はぬどの何たる破廉恥で御座  
 いませう諸君試みよ昔時の藝妓の如何ものであつたかと振返つて見給へ  
 昔時の藝妓の意氣地と云ふものを土臺にして容易にの諾と云はせ身を棄  
 て仁と爲と者もあれバ心を苦しめて義を遂る者もあり金持を慕はせ貧乏  
 に弱らず勉めて其身を潔白よし勉めて其行ひを廉直にし志操凜然イヤ其  
 様々に堅苦勞しく云は無くつても宜が兎に角に斯云ふ氣立で御座いまし  
 たから金持の客がイヤ千両箱を山やど積んで呼びに来てても自分の氣に  
 食あけれバ之に肘を食はして貧乏の治郎に身を委せる者もあり貴人がイ  
 ヲラ玉の輿を以て迎へに来てても自分が嫌だと思へバ肯首を振て手鍋提て  
 も情郎の傍へ行く者もあり皆品行不正を以て第一の恥辱として居りまし

たが是が即ち藝妓の本分で御座います今日の如く技を賣すして情を露く  
 の其職分での御座いません(ヒヤ〜)然れば今日の藝妓と昔日の藝妓と  
 を比ぶれば其優劣の果して如何で御座いませう近來の有様の藝妓の行爲  
 か將た娼妓の所業かイヤ片羅さへ見れば只ベ〜ジャラ〜して其片  
 羅を掴まふとする處の丸で私窩子の仲間御座います(ヒヤ〜)藝妓の鑑  
 札を持ち藝妓の看板を掲げながら私窩子の實を行ふて其法も負き其律を  
 犯すの即ち是れ天下の罪人で決して藝妓といふ云へません故に此罪人と云  
 はれ應來寐兒と謗るゝを残念と思へバ此の如き私窩子の仲間を脱し品行  
 を方正にし志操を堅固にし藝妓たるの職業を守り藝妓たるの本分を盡し  
 今日醜體を一變して昔時の俠風と挽回し白日青天の下に大手を振て自  
 己の藝妓様だぞと云ふ様にするより外に仕方がないがサテ何も今の分  
 の爾も行ませんかね若しさう行かきや矢張應來寐兒で御座ます(大喝采)

○第六十五席

夫婦喧嘩を戒む

天下に伶俐の人なきか伶俐の人があつても時機に遇ふれば罽毘の皺を伸す事が出来ず罽毘の皺を伸す事が出来なければ矢張り阿房と同じ事で御座います天下に阿房あるか阿房の人があつても自分で其阿房だと云ふ事を知らなければ矢張り伶俐の人のやうで御座います(ヒヤ)今若し伶俐人の阿房人を愚弄し阿房人の伶俐人を敵視すれば天下の二六時中喧嘩争論の絶間が御座いませぬ之に反して互ひよ一步を譲つて抗抵しあければ天下の泰平にして百業も進みます故に伶俐の人の素より無くて成らず阿房の人も亦た無くて成りません毛唐人先生曰く君子無ければ野人を治むる能はず野人無ければ君子を養ふ能はずと實に是れ御尤も亦寐言で御座います(ヒヤ)夫婦の間柄も矢張りこれと同じ理屈で如何に佳人と才子が夫婦に爲たにせよ互ひに短所のホヂシリ競をした日に何様者でも短所のあひ者のありませぬ然ら初め夫婦と爲る時にも夫婦の百年

の大事と云ふ位ですから只無暗に軽く粘着きい様にすべきの勿論の事で御座います粘着の後も亦た互ひに勘辨仕合ふ處がなければ成りません近頃の結婚法と云ふものが無茶苦茶に成つて初めに粘着の磁石の鉄に於るが如く速かかれども其離れる時の硝子か瀬戸物を石に叩き附たやうで御座います(ヒヤ)而して其離合の速かあるの何故で御座いませう當り其初めにお手輕様で粘着のみならず我儘病が最も之に關係して居りますから亭主が伶俐と自負すれば女房も亦た伶俐を自負し亭主が馬鹿と晋れば女房の頼痴機と罵り罵晋の鈍詰りの播鉢が疊に跳り播木か空に飛び髪を耄り腕に食ひつき或ひに怒り或ひに泣き遂に痴情破情の乱痴機騒動を引起すので御座います扱さうあると亭主も女房も両方とも阿房と謂はなければ成りませぬ(ヒヤ)官民の間も矢張り此の夫婦と同じ事で若し互ひに馬鹿と利口との争ひをして居た日に何時まで立ても親しむ時の御座いませぬ當り親しまぬ計りでなく其争ひのドン詰りの喧嘩と爲

り喧嘩が一變すれば大騒動と爲るで御座いませう(ヒヤ)有鬻公の曰く  
 人民の皆愚かり殊に民権黨を以て愚の極端と爲す其身の立派に衣服を飾  
 る事が出来ず其腹の十分に飯を食ふ事が出来ず恰も乞食同様の生活をし  
 て居りながら唯口の先ばかりベチャッチャ饒舌の丸で發狂人の沙汰ぢ  
 や何が樂みで彼様を馬鹿を真似をするのだらう彼様を馬鹿を奴と一所あ  
 社會に立つ事の出来んと又民権黨の曰く搦士の皆卑屈である唯へイ  
 屈突張て他の鼻息を窺ひ縦に一條の電信に依て浮雲の生計を營んで居る  
 が彼でも心が安まるか人間に皆天賦の自由と云ふものがあるものを其  
 天賦の自由を棄て俸祿の束縛を受るとの實に卑屈である古英雄も爾云ッ  
 たで無いが武士の食ねど高楊枝と凡そ男兒たるもの死しても此氣性  
 の無くて成らんものだ然るに五斗米の爲に腰を折るとの活智があいと  
 (ヒヤ)諸君官民の間に於て若も此の如き事があつたらば恰も犬と猿  
 との如く到底調和する事の出来ません願ふに有鬻公の皆必ら老伶俐あり

民権黨も亦た必らずしも皆阿房での御座いませんから試みよ両方を權衡  
 に掛れば決して大した優劣の御座いますまい大した優劣が無ければ互ひ  
 に勘辨を仕合ひ相譲つて何も糞味増に相言るに及びますまい果して然  
 らば民権黨の何が故に政黨と組織して民間に威張るので御座いませうか  
 官權黨の何が故に政黨を目掛けて敵視するので御座いませうか是の所謂意  
 敵痴ある者の然らしむる處であらうと思はれます(ヒヤ)ソコで此意  
 痴と云ふ奴の意氣地に似て非なる者で御座います意氣地と云ふのの俠氣  
 を含蓄して居りますすけれども意故痴の方早く云へば糞燒了簡を帯びて  
 居るから何處までも抗抵して一步をも譲らまいと云ふ馬鹿げた氣合の者  
 で御座います故に若も両方が意故痴でなく意氣地と云ふ方に立廻つて  
 婦の情を顧みれば阿房だからとて馬鹿にせず伶俐なればとて威張にも  
 らず官權黨の政黨を以て社會に害ありとすれば解散せしめて宜し民権黨  
 の官權黨を以て國家に益ありとすれば諷めて宜し百事皆相談主義に去た

さらば決して掴み合ふやうな事御座いますまい官民調和の得策の敢て  
 賣卜先生の手数を煩はす迄の事御座いません(ヒヤ)併しおがら唯我  
 獨尊の弊を廢さなければ到底官民の調和の出来ませんナせおがら人間  
 馬鹿でも頓魔でも蛆虫でもありませんから皆多少の靈魂と云ふものが御  
 座います既に多少の靈魂があれバ皆必らず罽丸の皺を伸し度と思ふの  
 是れ亦た人情で御座います凡そ治郎にして罽丸の皺を伸す路が無ければ  
 治郎の必らず不平を起します不平の必らず不和の基ひで御座います(ヒヤ  
 ヒヤ)且つ夫れ一個の男兒にして多少の學識を有し一生涯罽丸の皺を伸す  
 事が出来て死だ日よの罽丸に對しても誠に耻かしい譯で實に以て殘  
 念至極で御座います故に官民の調和を望まバ人才撰擧の路を開くが第一  
 の早手廻しで御座います苟くも此路を開けば天下の人才の遍く出て來ま  
 すから調和を爲すまいと思ふても自然に調和が出来るで御座いますせう道人  
 の甚だ夫婦喧嘩の嫌ひな男で御座いますから裏店の路次を通る時の必ら

す耳の穴を塞いで通りますが大方の君子も此裏店社會の眞似を爲さらぬ  
 様に願ひ度もので御座います今夫婦喧嘩を戒める序に餘計な小理屈を並  
 べるも聊か老婆心の積りで御座います若もお氣に障る人がありますお  
 ら眞平御免下さいまし(大喝采)

○第六十六席

お目玉の説

前に帳箱を置き右に現箱を据ゑ二一天作と算盤玉を弾きおがら鼻垂小僧  
 を呼付けてコレ長松今日の使ひの急ぐ事の手前も知ッて居るぢや無いか  
 何も蚊も承知して居りおがら朝の十時に出て行つた者が午時にあつても  
 未だ歸らず一時を打ても未だ歸ッて來せヤット二時にあつてノッノッ  
 ヲッて來るたア何と云ふ多話戯だらう横着にも程があるぢや無いか夫だか  
 ら客人の欠伸して歸ッて仕舞ふし肝心を儲けの取れず實に馬鹿くしい  
 談しにも書にも書おぢや無いかヨシく其處に爾して居る旦那に爾云

ッて今度こそ暇を出して仕舞からと云ふの即ち番頭さんのお目玉で御座います(ヒヤ〜)ガラ〜ドテンナンこの物音を聞付け細君の飛出して来て鍋や(下女の名)お前の何故そんなに損財おのだらうねへ然だから私が平生云はさい事ぢやさいヨ摺木の毀れない物だからイッラ放出しても宜が茶碗や皿小鉢の放り出すと毀れるから放り出しての行かひよと云ッてゐるのに茶碗を放り出たり徳利を抛たり今年に爲てからもウ幾個だらう本當に困るぢやさいかねへ然れど毀した物のモウ仕方がさいから是からも能く氣をお附ヨとい是れ細君のお目玉で御座います(シヤ〜)オイ隠子よ拙者が此頃勤怠表を閱るのに君の欠勤の一ヶ月の中に十日以上もあつちや是の本當の病氣か何ぢやか知らんが一寸君の身体を見ても腹の便々と脹れて居るし顔の色は黒くツて誰が鑑定しても野郎が腹鼓を打やうで持病も何にも無さ想ふ見ゆるから平生に病氣〜チウオア横着ぢやチウ注意做給へとい是れ長官のお目玉で御座います(ヒヤ〜)

其方の何々の事件を記載したかハ記載致しました然らば其逐一を陳述致せハイ新様〜の譯斯々の次第で御座いますと舌を爛して辨明するも終に其功能なく詰る處の禁錮何月罰金何圓に處せらるゝは是れ新聞記者が常に恐れる所のお目玉で御座います(ヒヤ〜)扱お目玉とい猶大目玉と云ふと同じ事で目玉を大きくして叱り叱られる事で御座いますから叱られる者にハ權利なく叱る人に權利があるので御座います併し縦ひ何様も權利があらうとも悪い事を仕さいのに叱られる道理も無し又お目玉を食ふべき筈が御座いません元來お目玉を食ふの何か一廉の失策があるからか目玉を食ふので御座いますから平生にお目玉を食ふい様に注意するが宜しいメガ諺にも人に使はれるより人を使ふ身とされと云ふ事がありますからお目玉を食ふよりお目玉を食せる方に立廻る事を考へた方が宜しいかも知れません(大喝采)

○第六十七席

誤多交の説

夏

諸君……諸君の斯云ふ頓珍閑の話しを御存じで御座いますか「自家の神様の佛壇へ猫が犬の糞を垂たから此悪い治郎めと半弓の鉄砲で突て遣ふと思つたら流石は鳥類だけあつて塀を越えて泳いで逃た」と此話しの何の何兵衛が云つたのか知りませんが諸君の之を何とお聞に成ます定めし無茶苦茶だ誤多交だ出鱈目だ出放題だと思はれるで御座いませう(ヒヤ／＼成程これ無茶苦茶違ひかい誤多交に相違ない誰か聞ても出鱈目出放題で御座いますすけれども之を無茶苦茶誤多交と笑ひながら諸君の中にも此誤多交無茶苦茶に似寄た事がありますが是よいか心附が御座いませぬの(ウ／＼謙聴／＼)ト云つたら定めて諸君のお氣に障るかも知れませぬが道人が此に其証據を擧げて誤多交の譯柄を一寸お話し致しますれば先づ斯で御座います諸君ヨ今諸君達が頭も載いて居られる處の帽子の大層御立派で御座いますすが是の佛蘭西製か左も無ければ英吉利製だらうと見受

ます又足も穿て居らるゝ處の靴の餘程奇麗で御座いますすが是の獨逸の流行形か乃至また亞米利加の新形の様に思はれます而して其身に和製の洋服を着用して居らるゝの先づ上等の誤多交で其次の舶來の帽子を被つて身も日本服を着て三ツ紋付の羽織に婦人の肩掛を脊中から首へ掛けて手にも同じく婦人の蝙蝠傘を携へて足に和製か舶來品か知らんが兎も角半靴を穿て夫で口には巻烟草をパツ／＼吹して居るやどの随分誤多交の扮粧で御座います(ヒヤ／＼)併しおがら是等の誤多交の同じ誤多交でも出鱈目だ出放題との違つて早く云へば無茶苦茶と云つても宜やう者者の其身に取て便利でさへ有れば縦ひ婦人の肩掛を男が首も巻ふが男の靴を女が穿ふが夫の何でも宜しいけれども此誤多交が平生の言葉遣ひにまで差懸て来て前申した神様の佛壇へ猫が犬の糞と云ふ様に大和詞やら漢語やら英語やら佛語やらペランメーやら薩摩言葉やら味噌も糞も一所にコチ交て用ひるから時とするところジャツパンの日本製だのブツツの書籍だのと云

人事が覺ゆず知らず口の先へ出て來るのですが是ぢやア右の半弓の鉄砲  
を突て遣ふと思ふと云ふ一件も笑ふ事の出來ますまい(大喝采)

○第六十八席

交際の御馳走の廢すべし

近頃の種々様々の會が出來る中に兩三年前に贈答物廢止會と云ふ會が  
來ました是れ今でも矢張り永續して居るか打潰れて仕舞たか道人の會員  
でないから其存廢のほど知りませんが何に致せ贈答物を廢するの事  
道人も至極賛成して居りますナセ之を賛成するかと云ふに例へば權兵衛  
に入兵衛が牡丹餅を貰つた處で八兵衛の口に取ての誠に旨くて有難い様  
あもの、ドウも底が世間の義理で旨いからと云つて只ムシヤク喰て澄  
し込で居る譯にも行ず先方から牡丹餅を貰へば此方からも其返禮として  
團子を遣るか又の餅を遣るか凡そ先方から貰つた物に彼是伯仲品を遣る  
のが習慣に爲つて居りますが扱其遣るべき品が程よく他家から廻つて來

れば之を蒸返しても宜が自家に其品が無いと態々身銭を出して買て遣  
ければ成ません買て遣るのも宜がマサカ權兵衛の處へ是れ買ましたから  
と云つて遣る譯にも行かないから到來物とか何とか嘘を突て持て行の  
が斯爲て見ると取も直さま牡丹餅を買て喰たのも同じ事イヤ押賣をされ  
た様あもので御座いますから成程この贈答物のお廢止にした方が小面倒  
臭く無くて宜いで御座います道人の御馳走廢止の説も是から考へ出し  
たので御座います(謹聴)扱御馳走を廢するとい何の事かと云ふに諸君  
も御存じの通り東京人の交際上には妙き習慣がありました尤も隣近所の  
者の大抵番茶の一杯位で追拂ふけれども平生に足の遠い親類の者にしる  
又の知己朋友にしる一寸顔を出すと下戸にの餅或ひの蕎麥上戸にの酒を  
出すと云ふ様き事が例に爲て居ります是も恰ど贈答物と同じ事で先方で  
御馳走にあるの宜がマサカに御馳走に成つ放しよも成れず此方へ其人が  
來れば矢張り此方でも御馳走を仕さければ成りませんから詰り同じ事で



御座います殊に忙敷い時あどに無理も引留られても又此方の忙敷い時  
悠々と尻と落附られても其利害の双方共同じ事で御座いますから是  
お互ひに廢して仕舞た方が世話が無くて宜やうに思ひますが諸君如何で  
せう(大喝采)

○第六十九席

好事家の注意

世間も事を好む者の多きに豈に曾に濱の眞砂賽の河原の小石の類で御  
座いません今其多き者を勘定すれば開化を好む人の野蠻を好むより多  
く野蠻を好む人の民権を好むより多く民権を好む人の卑屈を好むより多  
く卑屈を好む人の名利を好むより多く名利を好む人の諂諛を好む  
より多く諂諛を好む人の壓制を好むより多く壓制を好む人の詐欺を  
好むより多く詐欺を好む人の官員を好むより多く官員を好む人の奴  
隷を好むより多く奴隷を好む人の幫間を好むより多く幫間を好むの人

の權妻を好むより多く權妻を好む人の藝者を好むより多く藝者を好む  
の人の娼妓を好むより多く娼妓を好むの人のお三どんと好むより多くお  
三どんを好む人の後家さんを好むより多く後家さんを好む人のお娘  
を好むより多くお娘を好む人の楊弓娘を好むより多く楊弓娘を好むの  
人の私窩子を好むより多く私窩子を好む人の新聞を好むより多く新聞  
を好む人の漢學を好むより多く漢學を好む人の洋學を好むより多く  
洋學を好む人の佛法を好むより多く佛法を好む人の耶穌を好むより多  
く耶穌を好む人の和學を好むより多く和學を好む人の芝居を好む  
より多く芝居を好む人の演説を好むより多く演説を好む人の講談を  
好むより多く講談を好む人の落語を好むより多く落語を好む人の圍  
碁を好むより多く圍碁を好む人の將棋を好むより多く將棋を好む人の  
球突を好むより多く球突を好む人の博戯を好むより多く博戯を好む  
の人の片羅を好むより多く片羅を好む人の泥坊と好むより多く泥坊を

好むの人の喧嘩を好むより多く喧嘩を好むの人の角力を好むより多く角力を好むの人の酒を好むより多く酒を好むの人の茶を好むより多く茶を好むの人の菓子と好むより多く菓子を好むの人の鶏卵を好むより多く鶏卵を好むの人の牛肉を好むより多く牛肉を好むの人の烟草を好む人より多く烟草を好むの人の色を好むより多く色を好むの人のイヤ此様事を云ッて居た日に何時まで饒舌ッても口の止度がありませんからモウ止ませうが扱諸君よ世間に事を好む者即ち好事家の多き事の先づ荒増斯様で御座いますソコで同じ事を好むにせよ好んで害ある事の餘り好まぬが宜し好んで益になる事から飽まで好むやうにするが宜し兎角物事に善悪と邪正と云ふものがありませんから其善悪邪正を自分て他人に害を與へぬやう又自分にも害を招かぬ様にト斯法螺を好み悪口を好む道人も矢張好事家的一部分で御座います(大喝采)

○第七十席

一口演説のお仕舞

扱諸君道人の随分根氣よく饒舌ました餘り饒舌過でモウ饒舌る事が種切に成ましたイヤ種切にも成ませんが諸君の方で定し欠伸が出せうから饒舌仕舞に一口宛四五題を一所に遣かして是で御免を蒙らうと存じます

◎四幅對 紺屋の白袴醫者の不養生易者の身の上知らずとハ誠に旨い三幅對で御座いますが道人の之にモウ一幅を加へやうと思ひます其一幅の何かと云ふに學者の不身持で御座います人に道徳の講釋をして娼妓の買ふものでない藝者の相手にするかと云ひながら自分が藝者に鼻毛を付したり或ひは腐り女郎を引張り出して女房に去たりする者を合せて四幅對で御座います(大喝采)

◎娘の風俗 昔日の女と云ふものの柔順く優しいものに極ッて居て殊に娘の中の男の顔を見ても耻かしがった者で御座いますが今の娘の之に反して其洒亞突あ事と云ッたら男の方で却つて面を赤くする様亦有様で御

座いますお負に日本服を着ながら靴を穿て大股歩行ばかりか時とする  
と生若い男と肩を並べて片言交りの漢語や洋語を遣ひながら歩行あどの  
岡焼で云ふ譯でいあいが餘り見ツとも宜も無いやうに思ひます(ヒヤク)  
○寄席に改良を望む五件 寄席に改良を望む事、澤山ありますすけれど  
も先づ差當り左の五ヶ條で御座います

- 一 狼褌を類する話しをお止にする事
- 一 坐蒲團の月は二三度づゝ洗濯して常に清潔にする事
- 一 空気の流通をよくする事
- 一 菓子子の直段を安くする事
- 一 番茶を煎じ出して土瓶に半分ばかりで壹錢との餘り高價過るからは  
も文久二ツ位に直下する事

○新聞の廣告 昔し嘘八百を長たらしく並べたのの賣藥の功能書で御  
座います此節の金さへ出せば新聞で廣告の出来る處から難でも艱でも

昔新聞の廣告を致します其廣告の中よの昔しの賣藥の功能書のやうに嘘  
八百を長たらしく並べて其品を買つて見ると何だ此様か物か馬鹿くし  
いと錢を出したのが惜く成るやうな事が澤山あります今この儘で最う五  
六年も立たあら人が新聞の廣告を信じない様にあるのの知れ切た事で御  
座いますから今の中に之を改良して廣告の成べくお負を附あいやうに眞  
正直にした方が却て利益での御座いますまいか(喝采)

○肝癩の我儘 肝癩と云へば一種の病氣のやうに思つて居て中に我  
子が勝手放題振舞をして親に飛附んばかりの乱暴をして痴段駄を踏み  
情々を混てもア、自家の子の何云ふ者か肝癩が強くつて仕方がない杯と  
澄し込んで居る人が世間に行々ありますナニ肝癩と云ふのの我儘の  
功勞を経たので決して病氣での御座いません其証據に自分の親や兄弟  
にの痴段駄を踏んだり情々をコチたりしても他人の自分より目上の人に向  
つての自分に氣あ入らぬ事があつても情々を混る處か却つて縮身あつて

居ますから之を以て考へて見ても肝癩とい失張我儘に相違ないから何で  
も我子の小兒時から育て方が肝要で御座います(ヒヤ〜〜大喝采)

夏子

版權登録

滑稽一口演説 終

明治廿二年五月九日印刷  
同年五月十日出版

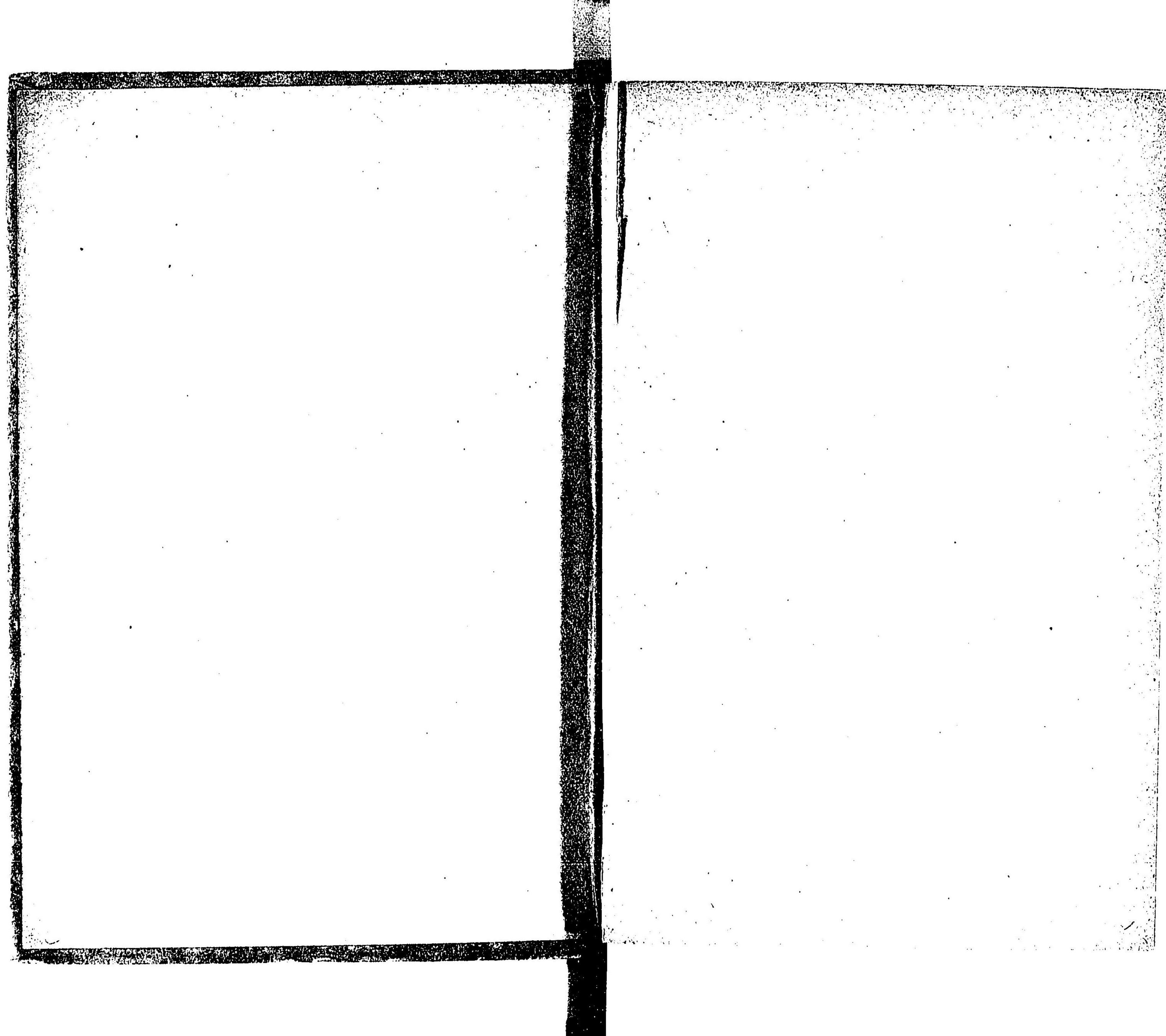
\*\*\*\*\*  
定價金參拾錢  
\*\*\*\*\*

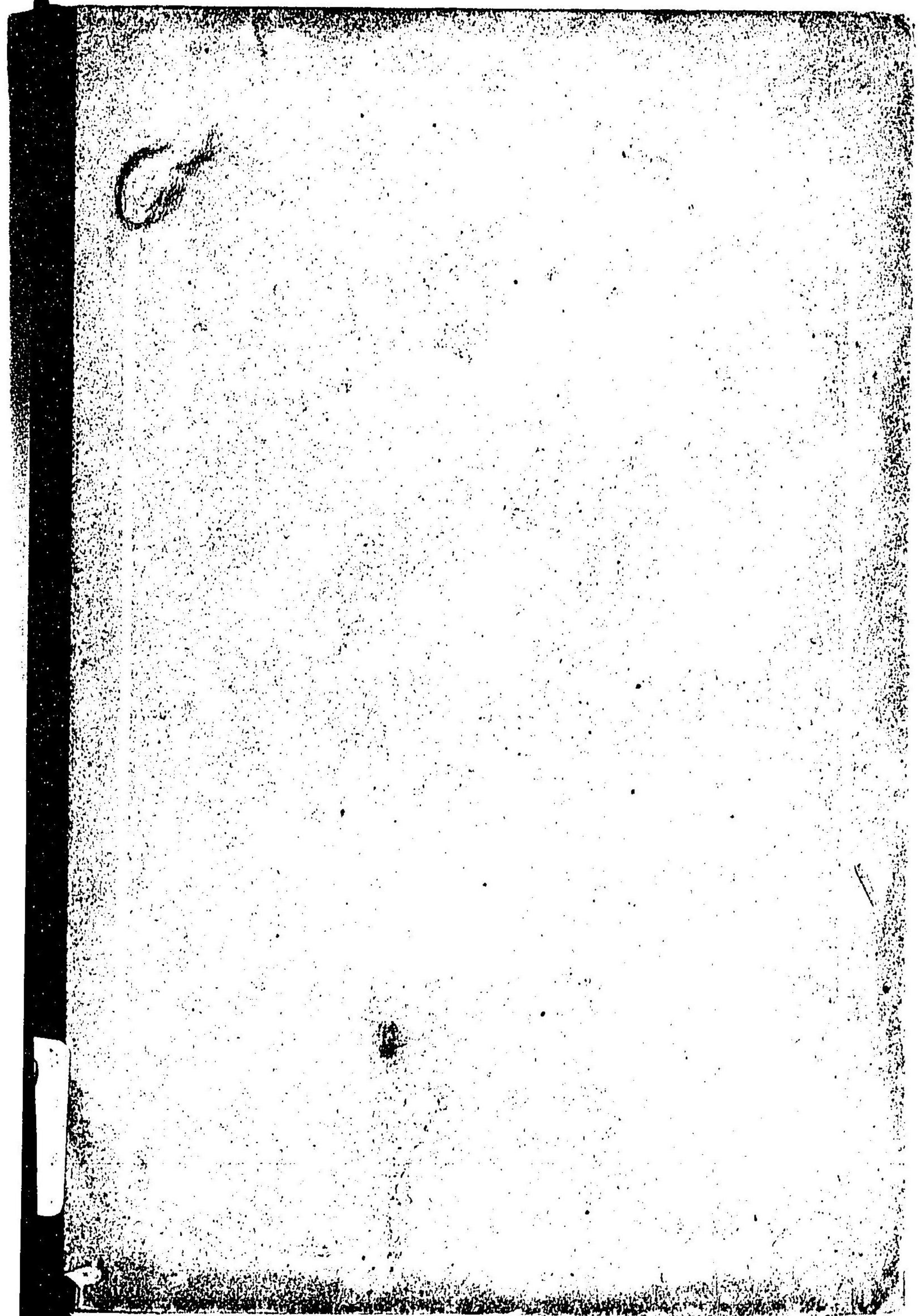
發行所 京橋區銀坐貳丁目六番地  
發行所 千葉 茂三 耶

印刷者 京橋區銀坐貳丁目十二番地  
印刷者 宮本 敦

發行所 京橋區銀坐貳丁目六番地  
發行所 共隆社

漢字







091705-000-7

特10-982

滑稽一口演説

和良井 鋤太/筆記

M22

DBO-0177

